March 20th 1904.

Report of the Sericultural Association of Japan.

NO. 142.

大日本蠶絲會報

明治三十七年三月二十日發行（毎月一回二十日發行）

第百四拾貳號目次

論叢

●時局に際し大日本蠶絲會員諸君に告ぐ　男爵　松平正直
●日露開戰と蠶絲業　農學士　吉池慶正
●日露戰爭と生絲貿易　農學士　紫藤章
●玉絲製造業に就て　鹽谷清多郎
●錫蘭に於ける野蠶飼育試驗　農學士　大林雄也
●清國柞蠶絲の產出狀況　兒島定七
●熱帶蠶業と溫帶蠶業　農學士　石渡繁胤
●芽枯病に就て　農學士　野村彥太郎
●柞蠶絲に就て　農學士　中村彥
●蠶兒の軟化病に就て　農學士　阿部保太郎
●植物の內科療法　農學士　理學士　堀正太郎

絲況

●横濱市場●紀伊市場●黑鼻市場●米國市場●上海市場

時報

●會務報告○役員の出張○蠶絲取引に關する委員會○蠶絲取引の件調査委員○決算調査委員會○評議員會○蠶絲取引に關する答申○大集會の位置變更○當出支會總會の矣狀○過賞支會狀況報告○會員紹介●蠶柔雜製●內地機業と地遺絲○從事會損益報告○蠶種に於ける蠶業者の失敗●組合發見●蠶業消滅●新刊紹介●寄贈書目●交詢錄抄●過賞支會役員式賞狀金

TOKYO.
The Association;
No. 2 Mitsuhitiroebo, Sanchome, Kanda, Japan.

會員諸君に望む

本會は去る明治二十五年の設創に係り歳を閲すること茲に十有三年を經過し今や會員の數無慮七千有餘名の多きに達し支會の設立を見ること既に十有六個所に及べり其發達の速なること此種の團體中未だ曾て其比を觀さる所なるべし是れ固より有志諸君か熱心蠶絲業の改進を企圖せらるゝに外ならずと雖も抑も亦本會か斯業に盡瘁せる結果ならずんばあらざるなり故に本會は自今益奮勵努力以て遂に本邦をして世界第一の蠶絲國たる實を擧げんことを期せんとす然り而して此目的を達せむと欲せば勢ひ普く全國當業者諸君と氣脈を通絡し知識を交換し協心戮力以て事に從はざるべからず之を行ふの法他なし可及的廣く當業者諸君をして本會の綱領を知悉せしめ贊襄を爲さしむるに在り若し夫れ一人の會員を增せば本會の事業は更に一歩を進むべく十人を增せば尚ほ十歩を進むるに至るべし即ち其目的を達すると否とは一に會員の增加如何にあり了存す因て本會は切に願む當業者諸君の奮て入會し相供に提撕して愛國の誠意を盡されんことを蓋し本會か他日此一大目的を達するあらば是れ一に諸君の賜にして諸君の國家に盡さるゝの功實に偉なりと謂ふべきなり

明治三十七年三月

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報廣告料（三十六年改正）

	特等				並等			
	一頁	半頁	四分ノ一頁		一頁	半頁	四分ノ一頁	一行
一頁乃至二頁	會員外 十二圓	七圓	四圓	十圓	六圓	三圓五十錢	廿五錢	
	會員 十圓	六圓	三圓五十錢	八圓	五圓	三圓	二十錢	
三頁乃至五頁	會員外 十圓	六圓	三圓五十錢	八圓	五圓	三圓	二十錢	
	會員 八圓	五圓	三圓	六圓	四圓	二圓五十錢	十八錢	
七頁以上	會員外 八圓	五圓	三圓	六圓	四圓	二圓五十錢	十八錢	
	會員 六圓	四圓	二圓五十錢	五圓	三圓	二圓	十六錢	

●本報定價　一冊　金拾五錢
一ヶ年分前金壹圓五拾錢

一頁は一行二十七字詰七十二行とす
四分の一頁未滿は行數を以て計算す
特等は四分の一頁未滿を謝絶す
歐文は特等の例に依る

明治三十七年三月二十日印刷發行
東京市神田區美土代町三丁目二番地
編輯兼發行人　小池市松
東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎
東京市神田區美土代町二丁目二番地
印刷所　三秀舍活版所
東京市神田區美土代町三丁目二番地
發行所　大日本蠶絲會
電話番號本局一千四百七十三番

大集會會場變更

緊急稟告

大日本蠶絲會第十三回大集會は福島縣福島町縣會議事堂に於て開設の筈なりしが時局の爲め同地に開催致難き事情有之候に付來る四月二日正午より東京東京府北豊島郡瀧ノ川村東京蠶業講習所内に於て開催致候事に變更候條此段稟告候也

明治三十七年三月　大日本蠶絲會

夏蠶の原種

●定價 一原種用種紙一枚金五十六錢 百枚一割引代金一圓八十錢

要望詳細 者は前金を添へ至急申込あるべし送金は郵便爲替なれば大熊郵便受取所宛の事は錦通知次第に明細書を送り案内書を進呈すべし

信州下高井郡延德村

合名會社 高明館

傳習生募集

本社蠶業傳習生正科（一年）三十名募集す志願者は來四月二十日限出願すべし但履歴優等のものに對しては練習科に編入試驗を行ふ規則書入用者は武錢郵券封入申込むべし

山形縣北村山郡楯岡町

羽前北進社蠶業傳習所

●會員諸君に告く

本會々費は規則第八條に據り前納すべき規定に付本年分會費御未納の向は至急御拂込相成度候也

明治三十七年三月

大日本蠶絲會

桑樹栽培法

農學博士鈴木梅太郎君著

實價郵稅共前金貳拾五錢　會員金貳拾錢

右は目下歐洲留學中の農學博士鈴木梅太郎君歐洲最要の養蠶國たる伊太利及匈牙利國に於ける桑樹栽培法の調査を農商務省農務局にて印刷に付せられたるものなるが斯業上頗る稗益ありと認め本會特に請ふて允許を得當業者蔘君に頒つことゝなせり有要諸君は部數限りあり至急申込あらんことを請ふ

大日本蠶絲會

論叢

時局に際し大日本蠶絲會員諸君に告く

大日本蠶絲會會頭　男爵　松平正直

露國の無道なる難を東洋の天地に構ひ抗力に乏しき淸韓兩國を壓迫し、彼は不當の權利を貪り、或は個々十數億の賠償を要求し、遂に到らざる所なし、嗚呼露國は世界文明の敵、東洋平和の仇にして人類の公敵なり、我天皇陛下は天下の公道に鑑み、宇内の大義に依り、宣戰の詔勅を發し、國の榮枯を憂慮し給ふ、洵に千古未聞の大快事なりと謂はざるべからず、今や十萬の銳鋒は滿洲の廣野を覆ひ、旅順の要塞を冒し命を鴻毛よりも輕んじ、二十五萬噸の艦隊は黃海の波濤を蹴て、敵を撃滅し、國家の爲め皆犧牲せんとつゝあり、國家の爲め皆犧牲せんとつゝあり、國家の爲め皆犧牲せんとつゝあり

なるを感ずるものなり、今茲に生産力を増すの必要を痛感すべし。

一、軍費を要する為國家は軍事公債を募集す、國民たる者之に協力するの義務あり、又戰時税を増徴せらるゝ場合にも之れが負擔を甘受さるべからず。

二、最も生産力に富む所の壮健なる三千歳前後の壮丁は召集せられたるを以て、其餘の國民は之が爲めに缺陥せる生産力を補塡せざるべからず。

今や正に此の如く重大なる責任を担ふ國民に適ふ、徒に戰捷の報に接して驕慢なかるべからず此氣慨ありてこそ日本の蠶絲業は世界に覇を稱するを得べし茲に於て平我國は軍事商戰兩ながら全局の大捷を納め欧風強兵を車實的に為し國運隆昌するに至らんと決して空中の樓閣にあらざるべきを信ずるなり講習筋骨、

良きに適し國力以て軍備を擴ふの氣慨なかるべからず此氣慨

蠶せやつてせ機の女郎
つてすまことの一目の
かがこの蠶の力にて
とつくに人も引ぎれさて
みなと〳〵に大ふれの
つつなとつなつなつつ
國のうまかねなれとなり

無記計三

日露開戰と蠶絲業

（三重支會總集會に於て）

大日本蠶絲會
技師委員　吉池慶正

此軍國多事の時に於て三重支會總集會を開設せられたと云ふ事に就ては私も多少奇異の感念を起しましたが、退て深く考へ翔て其適當なることを見出したのです、何ぜかなれば東洋平和の仇なる露國、世界文明の敵なる露國碑懲の軍は起され、迅雷耳を掩ふに暇なしと云ふ勢を以て我海軍は仁川に旅順に大捷を奏し、宇内列國をして嘆賞せしめたるは畏くも陛下の御稜威と武勇絶群なる軍人の働の致す所で、國家の爲實に欣躍に堪へざる次第でありませう、去りながら是れ漸く戰爭の端緒に過きぬから決して之を以て安心することは出來ない、露國の土地の廣大なる、人口の多數なる、而も國民の膽勇なる風に歐洲各國の恐怖する所である、我日本に於ては敢て之を恐るゝの必要はない、けれども又決して侮るべからずである、それであるから露國をして膺懲の實を現はし再び東洋の天地を窺ふこと能はざるまでに至らしむるには幾何の時日を要すべきや今より豫期する事は出來ません、戰闘の事は忠勇なる海陸軍人に托すべきも、此軍人をして技能を揮はしむるには内にある國民は有力なる後援をなさねばならぬ、豊富なる軍資を供給せねばならぬ、就ては此時に於ける國民の覺悟としては節儉を守りて冗費を省き生産力を増加して敗人

し又我蠶絲の最大需用者なり、故に稠布生産品は著人の發達は蠶絲業の有望なる更に敵々を要せざるなり、聞くに仁川旅順に於ける海の有望なる益々は早く、國地に傳はり、日本品の實行顧る活潑なる事を加へたりと、蠶絲は原料なるを以て美術品若くは工藝品の如きものは、自ら其授と異なり、工藝品は拓する、或は夫れ困難なる事なれ、然り而して好評を大懐かしむるは疑なく國家の榮譽の下に氣息奄々として殘喘を保ち、蠶絲國國は僅に國家保護の下に氣息奄々として殘喘を保ち、伊國の勇氣挫折し、清國は未だ全く當業者の遠夢覺めず、常者の大霧に非ずの打驚倒る頗る蹌

一國の好季節なれば、品質の精良と價格の低廉とを唯一の武器とし、米國邊業界に奮闘するあらば更に一層の需要を増加するやは疑なく蠶絲の生産販賣等に關する前述の如く蠶絲の販路は戰時に於ける國民の事業として蠶絲業は最も得策なりと信ず、然れども蠶家に多數の費を招くが如き原料の購入、工女の雇傭を競爭に於て蠶絲商の事なり、蠶家が細りに成り、

を多くすると云ふこと最も急務中の急務、緊要中の緊要である、此生産力を増すに就ては何れに之を求めなせうか、第一に諸君の從事して居らるゝ蠶絲業である、此蠶絲業の改良發達を議る爲に今日此想集會を開けらるゝと云ふは面に適當の所業であつて、殊に會の擧行は御祭騷きに流れず、熟心に質素であるのは私の欣幸に堪へざる所であります、聞く所に依れば當國は此事件起るや狼狽爲す所無かりしが、前に一旦着同した米國墨路易博覽會の出品を取消したと云ふことである是れでも大國民の態度と謂はれませうか何んと憫笑の至りではありませんか、是より一歩を進めて當國と蠶絲業との關係を研究致します。

養蠶上の勞力　出師の爲に徴備後備であつた所の壯丁は召集されたから勞力を要する事業は其生産力を減殺されたかも知れませぬ、之に反し養蠶は老幼婦女何れも從事するとか出來るから生産力は減じないと思ふ、或は事增加したであらふと考へます、何ぜかなれば此戰爭の爲に上下一般に緊縮の觀念を起し險約をする、其險約の最も爲し易きものは衣服で、糸布を着用せし者は木綿にする、それだから最も此戰爭に就て打擊を蒙つたのは內地向の織物業で、殊に絹織物は最も甚しいに相違ない、之に從事して居つた工女等は失業の方へ仕向いたと云ふ譯だから、從來勞働の昇騰に苦んで居つた養蠶界は低廉なる勞力を得られ生産力を增加するであらう信ずる。

併しながら養蠶上には意識を要し熟練を要する者であるから、唯勞力を增加したのみでは仕方がない、最も其意識を要し熟練を要するは種蠶飼育の際にあるは申す迄もない、何ぜかなれば蠶體は微小であるから氣候の寒暖にも敏感し易い、又病的の現象も容易に判らない、それで種蠶の飼育は最すの間に蠶兒の數を減少すると云ふ譯だから種蠶の飼育は最も困難で意識を要し熟練を要するのである、爲に私は共同種蠶飼育を御勧め申すのである、是れまで共同種蠶飼育に就ては兎角の批評があります所が、若し其成蹟が揚らないとすればそれは、共同種蠶飼育の罪でなく、他に原因あることゝ思ふ、共同種蠶飼育に就ては擔當者其人を得ると、蠶種は同人の製造したる同種で貯藏催青も同一の方法を採つたものとの要件備はらなければなりません。

桑葉の收穫　客年春蠶期に際し桑葉の霜害を被りたる結果として夏秋蠶の飼育激增し桑葉を慢摘したると、春蠶好果を結ばざりし爲養蠶家の經濟不如意にて、施肥寡かりし欠點はありますが、幸にしてこの頃高く氣候順調なる温度にて昨夜温度高く氣候順調なる發育佳良であつた、又今日に於て雨量の多いのは發芽を助くるものであるから、若し今後不良の氣候に遭遇しなかるならば桑葉の收穫は平年作或は夫れ以上であるであらふと推測致されます。

嗜注意を要する霜害　霜害である、近年如何なる關係によるか霜害頻りに至り養蠶家を惱ませるは諸君の了知せらるゝ所である、本年は應幾くは災害なきを切に祈る、けれども智者は而降るを備へ防ぐを綢繆するの方法を講じ違算なきを期するは最も必要と認むる分に豫防の方法を講じ違算なきを期するは最も必要と認むる現に昨年福島縣地方に激烈なる霜害がありましたが、共同燻

煙を勵行した地方は其害絶無であるが、或は其輕微であつたのです、此行爲は到底一箇人では出來ない是非共同一致して行はねばならぬ事である、

蠶種の擇立數　其年に於ける收繭額は桑葉收穫の多寡、氣候の順否、飼育の巧拙、蠶種擇立高の多少等で決定するものである、養蠶期に入らざる今日に於て蠶種の擇立高は不明であるけれども、昨年は東北關東方面の蠶種造多き地方は霜害あり、且桑葉も上作でなかつた爲蠶種の製造高は減じたに相違ない、斯く蠶種の製造高減じたに拘らず蠶種の製造者の手に未だ賣殘りがあるは何ぞ、是れは昨年新蠶以來生絲市場は不活潑であつたのと、此日養蠶家が昨年の爲に悲觀的感を起し蠶種の製造を減じたに基きましたと、私は此に於て是非養蠶をなさい處に於ては國民の發展に於て經營するに不利益であるとします、若し養蠶が此時に於て經營するに不利益であるとすれば他に於て何か有利の事業があるか、私は敢て知らないと云ふ事を斷言するを憚らぬのであります。

此の如き養蠶上に於ける要素を解剖致しますと飼育に從ふ勞力は多く飼料たる桑葉も寡からず、之に反し蠶種の擇立高は少くないと云ふことに歸着する、此觀察にして誤なしとすれば本年は蠶業上に採りて甚だ好望であると言はねばならぬ、然れども向一つの有力なる要素がある、それは外でもない氣候の順否で、現今に於ては未だ養蠶の技能は全く自然に打勝つまでに進まないから、氣候の順否は今より豫知する事が出來ませんが、けれども此頃三年は不順であつたから、年、不作は繰くものでない、歳々豊作も續くものでないと、の譯から考ます、併し唯一との氣候は如何に適當でも飼育は如何に熟練の人に讓り申延べませんが、唯之を實行すれば上作を得られないと云ふ關門がある、飼育しなければ即ち蠶兒の消滅で、客年は到る處多量の豆桑蠶

ありませう、何ぜかなれば現今に於ける本邦の輸入額は製絲業に比して少ない、爲に終年製絲を造ひて工場は極めて僅少の紡績に繰りて其不利益なる貧れたいのみなら、ず、居る、其結果として輸入、工女雇傭等の競爭起り製絲界を擾亂して來つたのであります、それだから自然的の淘汰が行はれて、弱なる工場が倒れ、秩序的となり、生絲の榮固なる品質も改良され經濟上に於ても得る所が多いと考へらるゝ、更に此機會を利用し小製絲場の合併若くは合同を圖ることは甚だ必要であると思ます。

製絲の資本　毎年製絲家が原料購入の期節に際しては多額の資金を吸取するから金融上に多少の波瀾を與へるのです、それで、本年は國家は軍費と奬業せられ、又戰時費を增徴せられる、から金融は逼迫する金利は騰貴すると云ふ有樣で困難を來すであらうと掛念する人もある、そは一應尤の次第であるけれども、日本の經濟界は多少增殺せられ、價格の不健全でもあるが、一方に於ては資本の不足せるは、日本は一手に引受けると云ふて進みたい、是非夫れなくて進ませねばならぬ。

大日本蠶絲會は華族男爵富家氏を會長に、日本の蠶絲業の沿革と起因載し原の美本を、と、博覽會を出品し、日本蠶絲業に一人も漏ら子雪配付して日本蠶絲業の真相を知悉せしめ大に蠶絲の販路を開拓する、と云ふ希望で現に着々として事業を進行せしめつゝある。

終に臨みて一言申述て置きたいのは華族富家氏とは今回の戰爭に際て多年貯藏して居つた金類は日本銀行に提出して購求を請はるゝと云ふ事であるが、此等は洵に美事であつて今まで埋藏してあつた死物同樣の古金類は社會に現はれて幾分なりとも國家の役に立つと云ふ譯で滿足であらう、それだから諸君の中で御所有の御方は御提出あらんことを希望するが、併し諸君の所有せらるゝ桑園と蚕機と諸君の腕の中には無數の黃金は埋藏されて居るか、諸君の働き次第で幾らも黃金は產出する、就ては多數產出せられ今回の軍資は蠶絲業者は双肩に擔ふ、と云ふ位の意氣を以て此事業を經營せられんことを希望に堪へません。

其人の德望如何に關することて容易ず撓樣し得られぬ事かは知れぬが、是非此業を進歩せしめて見たい、そうした機には製絲業は前る蠶員の業と為なつて了せます。

製絲業に採りては此資本の關係の外は何等の影響もない樣に考へらるゝ、が其販路は如何でありませう。

生絲の販路　先に述べた日露戰爭に全く關係を持たぬでもない、即ち我國の、ことは、「方利益なる國の如しは震國の賞本主であると、同時に佛國、紐蘭物の輩客であるが、然しながら、其輩すべて、自國は勿論、伊太利にも支那にも減少するから左程深く驚くに足らない。

日本生絲の第一の得意とするは諸君の御承知の通米國である、米國にして需要の減少せざる限は左まで打擊を蒙むることはなかるけれども思ふ、夫れで米國の生絲需要の見込は如何であらうか、本年は大絲の間の運賃の下落のあるが、結果不況の兆あると云ふ事、夫れ故に、米國は、又織物は、式、復、の、の、の

三、生絲相場
四、運輸力の影響
　A　海運
　B　陸運
五、海上保險
六、通信機關の影響
七、本邦生絲の生產力
結論

一　生絲の對外需要力

本邦生絲の輸外に需要さるる、望なるものにして、此年增加の趨勢を顧はし、歐米市場に於ても重大視せらるゝに至りたるは人意を强ふするに足れり、今最近五ヶ年間の輸出統計を掲くれば次の如し。

年次	數量	價額
三十二年	五、九四六、九一一	六二、六二七、七二一
三十三年	四、四八三、一二一	四、二二、五、四六二
三十四年	八、六、九四五、九七	七四、三七、四八〇
三十五年	八、八六七、七三二	七、六八、五九、四七八
三十六年	七、三一、五、五三〇	七四、四二、八、九〇一

三十二年迄の輸出統計に就ては頗夢を避け遂に之を表示せずと雖も年々增加一方に進み來りたり、而して三十二年は開港以來未曾有の相場暴騰にして器械細度等は實に千三百圓以上の高直を顯はせり、爲めに輸出力も非常の增進を來せりと雖も、次年即ち三十三年度は之れが反動として著しく生絲相場の下落を見たるを以て、其輸出數量を減じたるも生產力は影響大なるものにして、其は來は一般生絲の賣易が稀薄なる結果として消費さるべき筈なるに拘らず

斯の如く本邦生絲の輸出中毎年其六割以上は米國に入るべきものとせば、日露開戰の影響が生絲需要に及ぼす程度如何を調査するには、須らく第一着に米國に對する觀察を以てせざるべからず、今昨年中各月に於て同國へ向て輸出されたる生絲の數量を前年即ち三十五年に對照すれば左の如し。

年次 / 月別	三十六年	三十五年
一月	五一五、九一七	四三二〇、五六
二月	三四一、三八六	三四五、六五九
三月	二九一、二一〇	一八四、九五一
四月	一九八、九〇九	二六四、二八二
五月	二〇一、〇六四	二五五、二四三
六月	八一、八七七	八二、三三六
七月	三四三、九五九	二七一、四九五
八月	六六六、二四八	三八八、四六二
九月	五〇五、〇九四	七九二、五八六
十月	四八三、〇九二	五六九、四八七
十一月	三九三、八一二	五六二、五五一
十二月	五六二、四五八	七一九、三八六
合計	四、五八五、〇二六	四、八七八、四九四

之に由て觀れば總額に於て二十九萬三千四百六十八斤の減少を見る。而して甚上半期と下半期の合計を比較すると次の如し。

日標	三十六年	三十五年
一月より六月まで計	一、六三〇、三六三	一、五六四、五二七
七月より十二月まで計	二、九五四、六六三	三、三一三、九六七

「上半期に在りては三十五年の同期間よりも輸出を增加したるも、下半期に在りては反對に多大の減少を見る、是れ時局問題の影響なるものならんと揣摩し得べしと雖も如斯は容易に首肯し難き處とす、是れ後章に於て述ぶるが如く米國の經濟界は下半期に至りて甚しく沈淪を來せし結果與りて大ならずんばあらず、然れども又進んで日露問題の熟度高まりたる昨年十月以降十二月に至る三ヶ月間の狀況を察するに左の如し。

日標 / 十月より十二月迄三ヶ月間計	三十六年	三十五年
	一、四三九、三六二	一、八六一、四二四

右の對照によれば著しく減少の跡を見る、之れを以て察すれば幾分此間の消息を窺ふに足る、又以て局部的問題の影響なしとは明言し能はざる所なり、他方に米國に在りては過剰上武尚を關係すること比較的多大なりと、假令滿韓の海陸に日露の戰雲凝結して蔭れざるも、米國の天地は何等の影響なかるべきを知り、却て同國民特有の緩慢度作物の凶獸等不時の惡影響は生絲の需要に著しき打擊を與へるとあらんも、將來此間役にて受くる影響は直接間接餘り多くの憂慮を費すに足らざるべし。

B 製佛國需要

佛國は米國と共に我生絲需要地として著名の二大國たり、然れども米國は生產する所なくして只消費專門なるに比し、佛國は有數の生產國たり、故に我生絲の需要程度に於ても米國の如く巨額ならざるのみか年々退減の傾向を示せり、今既往之に由て觀れば同國に對する輸出全額は一昨年(三十五年)に比し七萬八千七百七十七斤の增加を示せり、然るに同年間上下兩半期に於ける輸出額の比較を見るに次の如し。

日標	三十六年	三十五年
一月より六月まで計	六三九、七六二	五五七、八四八
七月より十二月まで計	一、〇一四、二六六	一、〇一七、四〇三

上半期に於て昨年は一昨年に比し增加したるも、下半期に至りては反て減少の事實を見る、尙進んで時局問題の切迫を傳へられたる昨年十月以降十二月に至るまでの輸出量合計を比較すると次の如し。

日標	三十六年	三十五年
十月より十二月迄三ヶ月間計	五六三、三七四	五七七、七二四

十年間同國に對し輸出したる我生絲の數量及價格を示せば次の如し。

年次 / 日標	輸出數量	同上價額
	百分率	
二十六年	二、一一六	四七、〇
二十七年	一、九三〇	一四、九四〇
二十八年	二、八五二	三五、三
二十九年	一、六三八	三五、三
三十年	二、五六六	四二、三
三十一年	一、六三一	三三、七
三十二年	一、八〇三	三〇、三
三十三年	一、八〇一	二六、〇
三十四年	二、〇三六	二三、四
三十五年	二、五七五	一九、五

而して昨三十六年は百六十五萬四千餘斤(二割二分六厘)價額千六百六十九萬一千餘圓に達し、一昨三十五年より多きこと實に三分一厘に及べり。

是れを以て觀れば昨年佛國に對する貿易は一昨年に比すれば增加したるの趨勢を知るべし、日露問題の喧傳せられたるは實に昨年七月下旬の事に屬し、以來暗雲暗憺として遂に本年二月上旬に及びしが、此間に於ける影響が如何なる程度に於てありしか精査し難しと雖も、今昨年中各月に於ける同國に對する輸出量の趨勢を表示し、之を一昨年に對照するに實に左の如し。

月別 / 年次	三十六年	三十五年
一月	一五一、六二一	一六七、四四五

右等の狀勢と以て推察する時は遠晴に於て增加したる昨年の輸出額が、下半期即ち日露開戰の起りし當時より以降に至り減退し、殊に十一月に以降に至りて一層甚しきを觀る。詳細に觀察すれば十一月に於ては五萬餘斤の減退は、十二月に入りて實に十二萬餘斤の減却と見たり。是等の事實は無意味に看過ずべき現象なりとは信ずべからず、吾人は此間に於ける消息に就て多少の憂慮を費さゞらんと欲するも得べからざるなり。

抑よそ佛國の經濟界とは露國の國債に關係を有するもの、之を米國に於ては日露の開戰は恰かも對岸の火災視て殊に日露開戰に亞ぐ其窮狀一層甚しく、軍費の要急益々迫り、今又明くか如くば十億法の外債を募集せんとすと、無論之れが最大の無墓者は佛國民なるべきを以て、佛國が露國の爲めに支出する資金や驚くべき巨額のものならざるべからず、今や佛國は實に投機若しくは賭博者に向つて資金を貸與したると同一なり、露國の挫折は此多大の借財に向て元金返濟は愚か、利子の支拂だに容易の事にあらざるべし、資金の支途にして生産的ならしめなば前途望無きにあらずと雖も、露國政府の軍備費に投じたる方針は此多大の資金を以て生産的の事業に投じたるものなるべし、今や戰報露國敗績の報に接し、佛國民間の人心は恐怖の極に陥り、以て於ける影響假令募集に成功するとも、吾人は之を抽示するに難しと雖とも、今後の影響蓋し輕々に看過すべからざるものあらん。

然り而して此多大なる露國放下の資本は我國人の目より觀

露國に向つて放下せられたるものを示せば次の如し。

國債	六、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
フィンランド公債	九、〇〇〇、〇〇〇
三分及四分利付	四九、〇〇〇、〇〇〇
商業資金	七、〇〇〇、〇〇〇
土地所有	一八、〇〇〇、〇〇〇
銀行	七九二、〇〇〇、〇〇〇
鑛山工業	六、九六六、〇〇〇、〇〇〇
合計	

見るべし佛國資本が露國に向つて放下されたるものの莫大なるを、國債の如きは實に千八百八十九年より千九百〇一年に亘りたるもの、然るに露國財政の困難なる非常なるものにして殊に日露開戰に亞ぐ其窮狀一層甚しく、軍費の要急益々迫り、今又明くか如くば十億法の外債を募集せんとすと、無論之れが最大の無墓者は佛國民なるべきを以て、佛國が露國の爲めに支出する資金や驚くべき巨額のものならざるべからず、今や佛國は實に投機若しくは賭博者に向つて資金を貸與したると同一なり、露國の挫折は此多大の借財に向て元金返濟は愚か、利子の支拂だに容易の事にあらざるべし、資金の支途にして生産的ならしめなば前途望無きにあらずと雖も、露國政府の軍備費に投じたる方針は此多大の資金を以て生産的の事業に投じたるものなるべし、今や戰報露國敗績の報に接し、佛國民間の人心は恐怖の極に陥り、以て於ける影響假令募集に成功するとも、吾人は之を抽示するに難しと雖とも、今後の影響蓋し輕々に看過すべからざるものあらん。

然り而して此多大なる露國放下の資本は我國人の目より觀

て驚くべきものなりと雖も、如ふとして除外ある佛國民の目より觀れば吾人の驚く程のものならざるなり、夫れ佛國民の豪裕なる已に世人の知悉せる如く、彼れが露國を初め歐亞其他に向て放下したる資本は實に莫大なるものにして、國債及其他は於て佛英露國を主位とし、西班牙、英吉利、墺太利、土耳其、白耳義、亞非利加に在りては埃及、トランスバール、亞米利加に在りては合衆國、メキシコ、アルゼンチン、コロンビア、亞細亞に於ては支那安南、暹羅、土耳其等成る多くものに向て、是等各國に於ては無慮三百億法に上り、凡そ我百二十億圓に達せりと聞かば財力幼稚なる我國民としては驚倒するの外なきなり、尚少しく餘單に涉るの嫌ありと雖も同國窓の一班を眺はんに、千八百七十年佛獨戰爭に當つて佛國敗戰の結果蒙りたる損害及戰費の切に就て調査したるものを見るに、償金及占領軍駐防費と合して五拾億二千七百十六萬三千八百五拾六法、巴里其他の市府より奪逃古頭軍に納付したる金額三千五百萬法、之に加へ軍費を以てすれば佛國が此戰に直接支出したる金額は百二十六億六千七百萬法の多きに達す、運輸交通の杜絶、工場閉鎖、商業の中止等より生じたる損害は如何少額に稱算するも此直接支出と相四敵せん、即佛國は此役に於て約二億五百五十億以上即我百億圓以上を損失したりと云へべし、是實に僅か一ヶ年餘の內に於て佛國は二州と割譲せる出來事なりしなり、ローレンジ、ロレーン、此戰役の爲め國かれ、其他戰死者三萬五千八百二十八人、女出し、疾病俘虜、論繁等五十三萬三千八百餘人の多きに達し、

年次	輸出額	同上價額
目録	數量	百分率
三十三年	五〇〇	四二·九
三十四年	七九	六七·一
三十五年	七七	六八·六

面して昨三十六年は九萬六千餘斤（一分三厘一毛）價額九十五萬四千餘圓に達せり、殊に近來玉絲の輸出を試み、將來夫れ明白ならずと雖も商途有望なるか如きの觀あり、結果は稍々好踏を見るに至ちんとは此國に對する輸出業者の着目せる所なるか如し、

國の經濟上に蒙りたる損害は實に莫大のものなりし、然るに戰終る間なく、紀清界の秩序回復し遂に現時の狀を見るに至る、其宮原はなしで惡らざる只管無嘆に堪へざるなり。

右の如き富裕なる國民が露國に向て支途したるものの方、露國放資額に比すれば二割三分三厘餘に出でずして、其國債のみとして六十億法の巨額に上れるも露國の國のみに過ぎざるなり、而して其大多數は不生産的に注入し惡たるのみとは、佛國經濟界に於ける影響は後に於て着々之を顯示すべきこと強ち不當の想像に非らざるなり。

C　對露國雷要

露國に對する我生絲貿易は最近の事にして、横濱原商店より特に同地に貿易研究生を派し組織輸出の途を開きたるは三十三年以來の事に屬し、今日に及び引續き計畫し居るものゝ如し、今以往に於ける露國輸出の生絲を表示するに左の如し。

の○○○

尚ほ定期市場に於ける相場を示せば左の如し。

明治三十六年度　横濱蠶絲外四品取引所

公定相場表（蠶絲器械太一番）

月別	蠶絲 最高	蠶絲 最低	蠶絲 平均	蠶絲 最高	蠶絲 最低	蠶絲 平均	蠶絲 最高	蠶絲 最低	蠶絲 平均
一月	一〇七、三〇〇	一〇三、〇〇〇	一〇五、八〇〇	一〇八、四〇〇	一〇四、一〇〇	一〇六、七〇〇	一〇九、七〇〇	一〇五、〇〇〇	一〇七、八〇〇
二月	一〇六、五〇〇	一〇一、〇〇〇	一〇四、二〇〇	一〇七、六〇〇	一〇一、九〇〇	一〇四、六〇〇	一〇八、一〇〇	一〇一、九〇〇	一〇四、七〇〇
三月	一〇三、五〇〇	一〇一、〇〇〇	一〇二、五〇〇	一〇四、一〇〇	九九、七〇〇	一〇一、二〇〇	一〇四、六〇〇	九九、八〇〇	一〇一、八〇〇
四月	一〇三、〇〇〇	九五、五〇〇	九九、四〇〇	一〇一、七〇〇	九五、七〇〇	九九、四〇〇	一〇一、〇〇〇	九五、七〇〇	九九、八〇〇
五月	一〇七、〇〇〇	九九、六〇〇	一〇二、六〇〇	一〇四、五〇〇	九九、八〇〇	一〇二、〇〇〇	一〇三、〇〇〇	九九、八〇〇	一〇一、〇〇〇
六月	一〇六、〇〇〇	九九、四〇〇	一〇二、〇〇〇	一〇四、七〇〇	九九、〇〇〇	一〇二、〇〇〇	一〇三、〇〇〇	九九、〇〇〇	一〇一、〇〇〇
七月	一〇三、〇〇〇	一〇〇、五〇〇	一〇一、七〇〇	一〇三、五〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇一、〇〇〇	一〇四、七〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇二、〇〇〇
八月	一〇一、〇〇〇	九八、〇〇〇	九九、八〇〇	一〇一、〇〇〇	九八、〇〇〇	九九、八〇〇	一〇一、〇〇〇	九八、〇〇〇	九九、八〇〇
九月	一〇一、〇〇〇	九五、〇〇〇	九八、〇〇〇	一〇二、〇〇〇	九六、〇〇〇	九八、〇〇〇	一〇二、〇〇〇	九六、〇〇〇	九八、〇〇〇
十月	九八、〇〇〇	九四、〇〇〇	九六、〇〇〇	九八、〇〇〇	九四、〇〇〇	九六、〇〇〇	九八、〇〇〇	九四、〇〇〇	九六、〇〇〇
十一月	九七、〇〇〇	九四、〇〇〇	九五、三〇〇	九八、〇〇〇	九四、〇〇〇	九五、三〇〇	九八、〇〇〇	九四、〇〇〇	九五、三〇〇
十二月	九六、〇〇〇	九三、〇〇〇	九五、〇〇〇	九六、〇〇〇	九三、〇〇〇	九五、〇〇〇	九六、〇〇〇	九三、〇〇〇	九五、〇〇〇

前二表を通覽するに實物市場定期市場共に十月に入り低落し、以來十一、十二の二ヶ月とも引續き低價にして絲況不振の結果を示さむは、時局問題の進行が層一層危險に陷り、國論沸騰し、露國の戰備日に益々急劇を加ふるを以て、初め平和の觀察を下したる株式取引商等も漸次開戰の避くべからざるを豫知し、過敏なる定期市場は早くも之れが影響を受けたり、定期絲相場の傳統は所かる重大なる問題に向つては必ず影の形に添ふが如く、實物市場に感應を與ふること斷して免るべかからざるものとす、されば新絲以來兎角絲況の思はしからざる爲め、殆なからざる痛魂を受けたる製絲家は、在苟待

人の實を取る能はず、加ふるに時局問題の前途を憂慮し成るべく買空の方針を取り、會々持越へんとする者多く、素より絲價の光明望むべくもあらず、悲境に向ひつゝあるに從つて利息の低廉に益々缺陥を大ならしむるの不運に陥れり。而して輸出外國人の注文は我對露開戰の遊べからざる勢の

ものなれば、横濱、對米、對佛、對伊、對獨、對墨、對秘、對露、對清、對朝、對蘭、對葡、對西、對瑞、對諾、對丁、對白、對露、對土、對洋の天地絲に關して、米國航路に於ては何等の障害なく、從つて運賃の如きも世人の想像するが如く多大なるものなるべし、今近時海外各地へ運送する生絲運賃を見るに、

（後表、マルセーユ、ジエノア、チーブルス、ブリンヂイシ、ヴエニス、ハンブルグ、アントワープ、ブレーメン、ハンブルヒ、マルセーユ、ジエノア各過ぎてアリース、同上、セントチヤヤンド、モントエルエル、アビニヨン、同上、オフフ、同上、ハコル、ズリ、メヌズ、アレキサンドリア及ターブルス、ニトリース、ベーリックス及トリポリ、ヴヂヤ

一、ボルドー	八圓	拾六圓
一、マルセーユ	九圓	拾六圓
一、ジエノア	九圓	拾六圓
一、ヴヂヤ	九圓	拾六圓
一、ハンブルグ	九圓	拾六圓
一、ブレーメン	九圓	拾六圓
一、ヴエニス	九圓	拾六圓
一、ハンブルヒ	九圓	拾六圓
一、アントワープ	九圓	拾六圓
一、ブリンヂイシ	九圓	拾六圓
一、ヴエニス	九圓	拾六圓
一、ヴヂヤ	九圓	拾六圓
一、ヴヂヤ	九圓	拾六圓

平時に於ては内國船よりも外國船が運賃低廉なり、殊に開戰前は歐洲より石炭の運送非常の多額なりが爲め歸航は輸出物運送の便多かりしなるべし、尚開戰中に於ては一般輸出物は影響を蒙るが如きも、從つて貨物運送の減少を來すを以て生絲運賃の騰貴は左まで大ならざるや明かなり

B 陸運

輸出生絲の横濱港に向つて出荷せらるゝは主に官線鐵道にして、私立鉄道は日圓、山陽、甲武線を其大なるものとす、今開戰の爲め運賃騰貴せらるべしとは想像し難しと雖も、軍事大輸送の爲め他の貨物の運延停滞を來すべきは即著なる事實にして、是れが爲め生絲運送の上蒙るべき影響は顧る多大ならざるべからず、彼の定期品の賃貸に於ける如く期日を最守すべきもの程重大なる影響を受けずと雖も、製絲案の多くは荷爲替を以て出荷するものなれば運送の遲滞延着等の損害は頗る苦心する所なるべし。

五 海上保險

海上保險は他の生命保險等の如く綿密なる統計を基礎とし算出して保險率を定むることを得ず、其關係複雑なるものなれば普通多年の經驗に基き、酌る確乎なるさ推定の下に定めらるゝものなれば、戰時保險率の如きも又素より一定の軌道を上下する能はざるを以て、開戰の爲め幾許の損害を蒙べきやは素より推斷することを得ざるなり、今平時に於ける生絲運送の海上保險に在りては。

原價百圓に對し凡分の三（一圓）即ち參拾七錢五厘内外なりと云へ、戰時保險の刺戟は日清戰爭當時に在りては、普通保險料に八分増即ち拾貳五厘、當時は四分増即ち二十五錢、終に即ち拾五厘増しとなり、而して三十三年北清事變の當時は戰時保險の増加を見ざりき。

今日歐開戰に當つては輸出生絲の海上保險料は騰貴するなり、戰時に常りては軍艦の護衛、或は交戰國の防害より電線敷設等の不虞の障碍を受くることは免るべからず、生絲貿易が毎年電報の利害に浴することは實に北ロシヤ、ヴラヂボストクの至りて一朝開戰を見るに至りてより内外電信の輻湊は必ずや電報取扱に關する尚限を設けられたり、幸に東京、横濱及神戸の三郵便局に差出するものに限り除外例を設けられたるも、是とて發信の際日本語、英語又は佛語の譯文を添へ暗號帳と共に發信局に差出すを要するを以て、取引秘密にせざるべからざるものは譯文の展示を爲し得ざるなからず、是等の事情よりして商機を逸するもの頗る多く、外商及び直輸業者の迷惑を感ずること少なからざるべし。

（後拾七錢五厘）
（拾貳錢五厘より初まり
戰時增加ゑ
一月上旬　同　二分の一
一月下旬　同　四分の一
（弐拾五錢）
（七拾五錢）位ならん
二月上旬（開戰前）同　四分の三
入分の三
入分の一
（五拾錢）

右は外國船なれども日本船に在りては非常の高値なり、郵船會社に在りては普通の保險は百圓に對し六拾錢なるに、昨年十二月中歐洲航路は百圓に對し武圓五拾錢に進み、本年一月中は五圓の下旬には八圓と爲り、更に拾圓に暴騰せり、印度行も同率に引上げられたり、而して一月下旬まで割増保險なき濠洲行は百圓に付五圓、米國行は武圓五拾錢に孰れも暴騰したり。

然れども生絲の輸送は平時と雖も大部分は外國船に由りて行はれ居るを以て、開戰の日より中立國船に依りて更に何等の不安なきを致すべし、殊に米國航路の如き太平洋上の大部分が米國の影響の下に在りて、世人の想像するが如く多大の影響を蒙ることなきものの如し。

六 通信機關の影響

郵便電信に對し

普通保險

七 本邦生絲の産出力

從來一起一仆浮沈常なき我製絲業界も、開三年前以來生絲市場の好望なるに由り、漸く多年の然眉を開き、茲に少しく下半期の絲況を振より不動打擊を受け、今や一陽來復一樓の光明を持つ、あるの時に際し、結構解けざる日露問題は俄々大河の決するが如く猛然として破裂し、又續ふべからざる至れり、昨年來の不況は實に進めり、此處暫くの光明を仰ぐ能はざるべしと雖も、是れ大勢上免る能はざるの數なれば苦心焦慮するも、此大難關を過ぎ前途遥り來るべき多大の福音を待期すべきは誠に我製絲家の

執るべき目下の窮度なりとす、惟ふに昨年の新講時代は製絲業家が要する資本は一般金融潤澤なる爲め敢て不足を感することなく、金利も低落せるを以て事業經營の上に於て著しき便利を得たるなり、然れども當時經濟の活潑なると金融緩漫にして春蚕豊作に至らざりしとを以て、購入の繭價は多少買び進たる傾あり、而して新絲以來の絲場思はしからざる爲め、一般製絲業家が蒙りたる損害は又實に微少にあらざるなり、今や春挽絲を製するに於て、季候酷寒中に際し生絲製造最も、寡少の時季なりと雖も、戰場開かれ經濟界の變動目前に迫り、金利界騰せるに當りて、是等製絲家が蒙る影響は多少免るる能はざるべし、況んや昨年近年軍事の進行に伴ひ、民間の流通資金は吸收せられ、引續き時々戰爭永續し、公債界の振ひ屈せざるに至らば、やがて諸事の變動は、然り、新繭等成新絲製造の時期にも起かんは、資金充溢せる當業者の如き他に仰ぐべきを蚕を蒙ることと疑ふべくもあらず、併乍此爲め容易ならざる蚕を蒙ることと疑ふべくもあらず、併乍此間題は戰爭の影響に出づるものと雖も、物來之れが程度と豫測せんは頗る困難の事に屬す、均しく戰爭の影響なりと雖も其戰爭期日の長短及びは海戰の勝敗に趨ひて異なり、續て陸戰接手利を收め、大勢我國に傾き上り得たらんには、假分戰亂の爲め經濟界の秩序を破毀したりと雖も、戰後の經營を衍るなれば、若人は敢て杞憂するの早計にして且正なるを信ずるなり、今過る二十七八年日清戰役の當時を按ずるに、軍事費としては陸軍一億七千百餘萬圓、海軍三千九百餘萬圓、合計二億千餘萬圓に及べり、而して之れが財源としては

二千三百四十餘萬圓	郵船金
一億一千六百萬圓	軍事公債
七千九百餘萬圓	償金の内

其他献金ありて裕に此始末を付けたり、當時政府の歳入は一億一千萬圓内外にして、政府紙幣及発換券の流通額は一億五千萬圓内外にして、而して國際貿易輸出入の總額又各一億圓に出で寸、然るに能く此顛亂に對する處置をして遺漏なきを得たり、加ふるに戰勝の結果として償金三億餘萬圓を得て軍備擴張の大經營を遂げたり、今現時我國の財政及經濟界の狀態を察するに、國庫剰餘の裕なるあらず雖も、國家の財政は非常の進歩にして、民間の資金又豊裕なりしは三年來以來の事實なりすと、假令軍事公債の蒐集あるも、一時に公債を吸收するものにあらず、加之其大部分は我内地に落ちち、他は海外諸國に流出せんとす、加ふに同國として英國の如き強大なる國あるあり、將來の資金に向つては多少の希望を繋くに足るべきものなきにもあらず、されば製絲業上に於ける資金の前途は過敏なる杞憂を以て迎ふるを要せず、只期する處は戰況の吉報にありとす、吾人は此點に向つて深く論及する能はず、只此戰役の爲め製絲業界の資金に及ぼす影響は、今日に於て多く之を論質することなくして、寧ろ今後戰爭の成行に就て觀察せざるべからず、資金に就ての影響の外製絲業界に蒙る所は別に変ふる所あらざるべし、軍夫の徴募者の召集等あるも、製絲業者の使役する職工は主として女工なれば、他の産業界の如く、素より之を精密的に論じ難し、此点に於て米佛兩國何れか其に居らんか其打擊實に悲慘なるものあるべし、然れども我生絲貿易に於ては、米國は大陸の産出多く、交通深からざる露國に比して、而も生絲貿易に向つて殆んど無關係なる所淺く、又受ること所の損害は北清及韓國貿易と、露領黑龍江沿岸の貿易に過ぎず、而して生絲貿易は是等地方に向つて全く關係を有せざれば、我對外貿易品中最も幸運の刈に在るものと謂ふべし。

若し夫れ此顛亂の爲め一大衝要地たる米國の天地に於ては、前章述ふるが如く雷雨の減退を來す虞なしとせば、大勢已に憂ふるに足らず、彼の佛國に至りては多少の影響免かるべからざるが如しと雖も、是れ又直接的のあらずして而も確乎たらざる推定に屬す、雷雨の大根底にして變動なかるべし、況の弱点は奢も憂慮するに憂せず、而して彼の戰時直ちに蒙る影響として逆輸、交通、保險料の騰貴等は、何れも避け能はざる數なりと雖も前述べたるが如く生絲貿易に於ける關係は、他の東洋貿易に比し寧ろ一歩を讓れるものなれば、是又世人の想像するが如く大なるものならざるべし、而して、内地に於ける消費即ち機業上に受ける被害は、時局切迫に際しては一時劇甚なるものありと雖も、幸に既況益好望なるを見れば假然として復なる望なし、以製絲業者は、[illegible]

以て生産力に於て、[illegible]

ぼす影響を論ずるに、素より之を精密的に說明することは能はず、只概要に就て推斷を下したるに過ぎず、況んや今後の影響に就ては單事業より豫知し難く、輕るしく斷案を下すに苦しむや。

傳ふ[illegible]

結論

前數章に分ち論じたる處は何れも時局問題の生絲貿易に及

玉絲製造業に就て（承前）

大日本蠶絲會
通常會員　鹽谷清多郎

第二　沿革

豐橋二川地方に於ける玉絲製造の起源は蔵として知るに由なきも、其始め養蠶家か各自收穫したる玉繭を仲買商人の爲めに低廉に買收せられしよりは、農閑に之れを繰糸し自家衣料の資に充てたるに創りたるや明かなり、故に此の時代は玉絲を以て巻も市場に現出せず、又自家用の目的なれば求めて製品を販賣せんとの觀念を有せざりしものならん、之れ養蠶地方一般に見る處の慣習なりとす。現に愛知縣下に產する玉繭の量は一萬一千二百餘石にして、之れに隣縣靜岡產を加ふれば正に二萬餘石に達すれども、巻も豐橋二川地方の玉絲製造の原料として市場に現はれざるのみならず、其の製品も亦た多くは各自に消費せられ、市場の賑ひを爲さるを見ても之れを推知するに難からず、然るに明治十八年の頃上州前橋の人此の地に來りて附近の玉繭を買へ集め、座繰製絲工場を開設し女工を養生せし以來、漸次普及して一ヶ年約五十個乃至百梱を產出し、遠州地方の機業者に供給せられたるものありと雖も尙其の多數は當地方に消費したるものゝ如し、後明治二十五年に及んで煮繭に炭火を用ゆることを革め、蒸氣を使用するに至り、工費を減じたると市價騰貴の結果、原る利純を增加したる爲め工場次第に增加し、遂に八九百梱を產出し飯路從て擴張して過半名古屋地方の機業者に供給するに至れり、以來瀋次隆盛に趨き明治二十七八年頃は約一千二百梱を產出し、中島丹羽葉栗三郡の機業著しく勃興するや、定期市場を一の宮町に開きて之れに供給し、明治三十二年頃より尙遠くの福井県生足利京都地方に販路を開き、紋羽二重、西陣等の原料に供せり、然るに事業の盛衰は經濟界の消長に伴ひ免れ能はざるの數に屬し、但日東天の勢ひ以て進歩したる機業も、翌三十三年は繭價の騰貴と絲價の暴落との爲めに一大顚撲を來たし、一時工場を閉鎖するの止むなきに至らしめたり、左れども悲運の軍艦は寧ろ改善進歩の動機を惹起し、從來當業者は銳意絲質の改良に努力し、從來僅に絹綿交織の材料として甘せしものゝ、今や絹綿物の原料として遙に寵井岐阜郡馬京都等に名を飛ぶに至れり、近來同業組合の計劃に依り、横濱市原商店の周旋に於ては、地方に見ざる綿密なる檢査を加へ輸出の途を開き、力無限の清國產繭を利用し盛に販業を營むするの期あらば、國利を增進すること多大なるべし。

第三　原料

產額僅少なりし時代は多少附近の玉繭買集に努めしも、前既に述ふる如く當地方の普通養蠶家は自己の生產したる玉繭は概ね之れを繰絲する慣習あるが爲めに、玉絲製造業者の原料として年々壹萬二川のみに需要する二萬石餘の玉繭は、滋賀、三重、京都、福井、島取、岡山、廣島、愛媛、高知、山梨等の諸縣より購入し、尙幾分は九州より輸入せり、仲買人は他國より入り來る者あれども多くは當地方の商人にして豐橋町に市場を開き製造者に供給せり、而して此の市場のみに集散する玉繭は約三萬石前後にして、當地需要の殘額は再び輸出し仲買商人と結托し、良繭買集の際玉繭を買入し、或は地方の製絲場に依托して每年買集の契約をなす者なり。●●●

繰絲工女は他府縣より出稼せる者殆と皆無にして、多くは縣下湯美郡の半島地なる漁村より雇用し、其殘分は豐橋町大川村附近の農家の婦女なりと云ふ、湯美半島は土地極めて瘠薄にして耕種の業振はず、島民多くは漁業を以て生活を營み人口の稠密なること縣下に比類なし、即ち豐橋大川地方は一家平均四人七分なるも、半島内は六人八分に相當せりと云ふ、是れ主として家計概ね富裕なるが、男子は近海に出漁し、婦女子は多く他に出稼するを常とす、體質極めて强健にして忍耐力に富み、能く繰絲の苦業に堪へ、良工女として便役せらるゝと云ふ、如斯工女の屬人容易なるが爲めに敎の信州地方に行はるゝ如き寄宿の弊あるを見ず、現時同地方に雇用せらるゝ工女の數は約一萬にして、十歲より二十五六歲の者多く稀れに三十七八歲のものあり。

賃金は前記組合定款に示すが如く、最初見習中は無給にして、相當熟達せば手極の優劣に據り差等を付し之れを給與せり、優劣の決定は普通製絲家に於ける一等、毎日の繰絲量と、絲量歩合及び絲質とに依り採點し、毎月末に至り其成績表を調製し、標準點を假定して、其れ以上の者は增給し、以下の者は減給す、而して普通に行はるゝ標準は絲量十匁を繰絲する毎に、此の方法に由り普通一日に得る賃金を以て之を加減せり、此の方法に由り普通一日に得る女の賃金は、上等三四十錢、下等七錢より十三錢にて、一般の平均は二十錢前後なり、而して多數の寄宿せる工女は、此の給料中より食費として一日六錢づゝ控除せらるゝ、今一ヶ月の就業日數十ヶ月とするも、食費小遣等の諸費を差引き、少なくも三四十圓乃至五六十圓を、通勤者は七八十圓を貯蓄すと云へり、今茲に大川村役場の調査に係る平均賃金表と、或る當業者の明治三十五年度に於て支拂ひたる賃數とを掲ぐべし。

| | | |

三十五年末より同三十六年始に屬するが故に、價格の如きは稍舊聞の感なきにあらずと雖も、大勢を通觀するには敢て遠からざるべし。

明治三十四年	玉絲一綑(九貫)の價額	玉繭一貫匁の價額	備考
七月	二二〇乃至二三〇円	一・八〇円	生春繭
八月	二九〇乃至三〇〇	一・八〇乃至二・二五	生夏繭
九月	二八〇乃至二九〇	二・〇〇乃至二・三〇	生秋繭
十月	二二五乃至二二〇	十貫目に付 五〇円	乾春繭
同月	二六〇乃至二七〇	六〇	乾夏繭
十一月	二二〇乃至二三〇	四八	乾春繭
十二月	二〇〇乃至二二〇	六〇	乾夏繭
明治三十五年			
一月	二〇五乃至二一〇	四八	乾春繭
二月	二二〇乃至二三〇	四八	同上
四月	二〇五乃至二一〇	四八	同上
同月	二七〇乃至二八〇	六二	乾夏繭
五月	二八〇乃至二八五	六〇	乾秋繭
同月	二二〇乃至二七〇	五〇乃至六三	乾春繭

尙次に某商店の調査を上ぐべし。

明治三十五年	春繭玉絲 九貫に付	夏繭玉絲 九貫に付	秋繭玉絲 九貫に付	春繭玉繭相場 十貫に付(乾繭)
一月	二二〇円	二八〇円	三〇〇円	五五円
二月	二三〇	二六〇	三〇〇	五〇
三月	二二〇	二五〇	二九〇	四七
四月	二一〇	二六〇	二八〇	五〇
五月	二一五	二六〇	三〇〇	五五
六月	二二〇	二五〇	三〇〇	一貫に付(生乾) 一・八円
七月	二四〇	二七〇	三一〇	一・七
八月	二五〇	三〇〇	—	一・六
九月	二五〇	二九〇	—	一・七
十月	二四〇	二七〇	三二〇	十貫に付(乾繭) 五八円
十一月	二三〇	二六〇	三一〇	五五
十二月	二二〇	二五〇	三〇〇	五〇

前表玉繭の相場は春繭を記したるものなれども、夏秋繭は之れに比し十貫に付五圓乃至十圓高價に位し、從つて生繭は一貫に付五十錢前後高價なりと云ふ、當時に於ける支那繭は五月より九月の間に百斤に付八十三圓乃至百圓の相場を有せり、而して絲價の最も高きは支那繭玉絲にして最も安きは日本春繭玉絲なりとす、今其絲價と繭價との比例を示せば。

	乾繭十貫の價格	玉絲一綑の價格
日本春繭	四八圓	二〇〇乃至二五〇圓
日本夏秋繭	五八	二五〇乃至二八〇
支那夏秋繭(或は春繭を含む)	六五	二八〇乃至三〇〇

右の如く玉絲の價格は一般需給の關係と原繭價格の高低に因るは勿論なりと雖も、又原繭を消費したる程度及絲質の品位に關することは言を俟たず、且つ一綑を製するに要する原繭の量は、目的とせる玉絲の品位と原繭の種類とに因り差異ありとす、即一綑を生產するの量概ね左の如し。

春蠶繭	三三貫乃至三五貫
夏蠶繭	三五乃至三七
秋蠶繭	三七乃至三九

即ち春蠶玉繭は三十三貫目乃至三十五貫目を消費して二百

圓乃至二百五十圓代の玉絲一綑を製造し、秋蠶繭は三十七貫目乃至三十九貫目を消費して二百八十圓乃至三百圓の玉絲を製產し得らるべきなり。

第八　販路

前旣に述ぶるが如く、往時玉絲製造の業尙未だ幼稚にして製品の粗惡なりし時代に在ては、遠州名古屋附近及丹羽、葉栗、中島地方の機業家を華客となし、特に丹羽、葉栗、中島の紬綿交織の材料として一時は生產額の八九分通を供給せしも、明治三十三四年以來經濟界の變動と、織物嗜好の變遷とは機業界に一大打擊を與へ、耐久の如何を問はず一瞥華美にして廉價の品を機織するの傾向を來たし、之れが爲めに光輝强くして且つ低廉なる作蠶絲原料大に歡迎せられ、年々三千綑以上の玉絲を消費せし同地方も俄かに減して僅に一千綑內外に下るに至れり、玆に於てか其影響は玉絲製造家に波及し、倒產の悲境に陷るもの續出し前途絕望の嘆聲を聞くに至れり、然れとも如斯悲境に陷れる當業者は多くは中產以下の者にして、平素優等絲を產出せるものは尙左程の困難を感知せさりしものゝ如し、爾來品位に改良を加へ販路も亦一變し、近來は京都、岐阜、福井、八王子、桐生、足利、地方に多量を輸出し、三十五年度の如きは八王子最も多く、福井京都之れに次きたりと云ふ、嘗て岐阜縣に於て調査せし處に依れは、岐阜縮緬同業組合員の消費せる玉絲は實に六千五百貫にして、同縣紬同業組合員の消費せる處は二千七百貫なりとす、又京都西陣織物及絲物の爲めに消費せる額は五千七百貫以上に達せりと云ふ、以て關西機業地に於ける玉絲需要の程度を察知し得べし、蓋し關東地方は有名なる座繰生絲の勢力範圍に屬するを以て、之れを壓倒して擴張を圖らんとするは頗る困難なるべきも、品質漸次改良せられ而かも價額幾分か低廉なれば、若し同業組合及當業者にして尙一層奮勵品位の一定を圖り販路の擴張に努むるあらば、紬綿交織及下等紬布の原料として、座繰生絲の得意を蠶食する亦決して不可能のことにあらざるべし、今次に豐橋町より八王子福井等へ運送すへき賃料を揭くべし。

八王子へ

一金一圓五十錢　運賃　　一金三十五錢　保險料

一金七十錢　作荷料

合計二圓五十五錢

福井へ（小包郵便として一綑を七分し包裝す通運となさは前者に同し）

一金三圓五十錢　小包郵便料　　一金十五錢　包裝料

合計三圓六十五錢

第九　品質

玉絲品質に主なる關係を有するもの二あり、一は原料の善惡にして、一は繰絲術の優劣之れなり、蓋し此の二者が製絲業上至大の關係を有するは素より言を待たざる處なれども、特に玉絲は此の關係の一層適切にして甚だ顯著なるものあるを知らざるべからず、而して原料上より及ぼす主なる關係は光澤、顏色、纎度、强伸力の四者なりとす。

玉絲の光澤は夏秋蠶繭を以て製造したるものの最も優等にして、一種白色の光輝を呈し、厚き羽二重の外觀として使用せらるる。支那産の如くして製したるものは、一般に脆なれども、普通支那生絲に於て認むる如く一層艶を帶ぶる如き狀あり、春蠶繭は前者に比し稍々劣等なるもの、如し、素より生繭（乾繰法の不良なる爲め）と、支那産の春繭と、夏繭繰湯淵濁の程度等、光澤に影響するものあるは一般生絲と差異あるべきの理なし、節は支那夏繭に最も尠なく、日本春繭に最も多しと云ふ、由來支那種は彼れが光天的特性と、日本種殊に小石丸種の如く、繭節極めて寡少にして、日本種は繭節に於て、大粒點として風に搖動するの處なし、若し夫れ將來玉絲をも海外の需要に應ぜんとするに於ては、繭節は支那種の如く、玉絲の通性と爲さず、努めて除去し、顧客の滿足を求めざるべからず、此の點より見る、當業者は支那種の如く、繭節を利用の策を講ずべし、品質の改良上、殆ど少からざる效果あるべし、又繭節と繭の解舒とは常に相伴ひ、解舒不良なれば概ね繭節多く、切斷頻繁なるか爲に、纖度も亦不齊を生ずるは玉絲製絲に於て將に著しく感ずる處なり。

繰絲の技術により品位に善惡の差違を生ずることは至りて明白なり、即ち前項に於て既に述べたる如く、品位の上下は工女の技術に關係し、其の製品の差を檢せば普通製絲に於ける、玉絲に於て、其の差の甚だしきを見る、之れ玉繭は二籠以上合同して繰糸し結繭したるものなれば、求繭の際常に二本以上の絲を生じ、絲糸相錯綜せるが爲め屢々斷糸するを以て極めて機敏に活足を要すると、繭層厚き爲め蒸繭の程度相々困難にして終始熟度を誤り易きに踏因せるものゝ如し、故に工女の技術能く熟達したるものにして作業周到ならんには、繭節尠なく纖度齊一にして座繰生絲を浸漬すべき逸品を生産し得べしと雖も、若し之れに反し工女の技術未熟なるか、或は絲況の昇降に乘せん爲め生産を急き妄りに絲量をのみ貪らんか、品位劣等なる往時農家の婦女子が餘業として繰製せしものと撰ぶ處なきに至る、聞く處に由れば見習より一人前の工女に達するには尠なくも二年以上の修業を要すと、以て其練磨を要するの程度を察知し得べし。

今次の横濱生絲檢査所の檢査成績を掲げ參照に供すべし

（但し明治三十五年の製品なり）

産地	繭糸中の切斷 平均	繭糸の太	繭節	強力	伸度
愛知縣産	三一 二〇五五	八四八	二七	六二〇	七〇七
福島縣産	三九 二七五二	一〇八一	三九八	三四三	九三七
平均	三五 二四〇五	九六五	三三七	四七六	八一二

（糸 量）

錫蘭に於ける野蠶飼育試驗

大日本蠶絲會
技藝委員　農學士　大林雄也

右は獨逸ヤユ、ハウヲ驛住パーゼ、コヌ、ヴライヤ氏が大林農學士の請に報告したるものに係る、今見大林氏其之を譯して特に本會に寄贈せられたるものなり

余か野蠶飼育の目的はタッサア及他の野蠶を含育せんとするにあり、而して此目的は印度に於ては古來成功し能はざるものと認定せられ、何人も試みるものなく、殊に僅ひの内に於て、甚繭の交翅を了するとの如きは困難の事なりき、然れども千八百八十年當地に在りて十八ヶ月を費し試驗したる結果、初めて之れが實行の疑なきを證明し、翌來工夫を凝らし、一昨年に至り漸く良果を得るに至れり。

昨年一月以來此新方法の聞ひに依りてタッサア及アトラス蠶卵の多數を收むるを得て、余か多年希望したる試育の事項に就て實行したり、而して此希望は本島に於ける農作中最も作付多く至る所に作られ居るか爲め飼料とするに供給の不足なく就中目下不利の狀態にあるものを選みて之れが利用を試みんとせり、這般の作物中には、茶、カアダモム、規那樹の如きは除く可らさるものなれは、余は野蠶含育に關係なき人々の異論あるに拘らず、以上三樹に製する試育を實行せり、而して野生の蠶兒か屢々此等の樹上に生育するを見たれば大に力を得て之を試みたり、其結果アトラス蠶繭の最優等の或るものはカアダモム樹葉に飼育したるものなりき、然れとも余は特に茶葉の現狀救助の一策として、茶葉に依りて飼育するも、其後得たる新工夫の經驗に依りて將來希望を遂行し得へき樂を有するに至れり、若し夫れ茶園中利益の見込なき部分を利用して更に二タッサア絹絲を生産することを得ん、茶業の困難を救ふに當りて其利益部からざるのみならず、刈込を休止して野蠶飼育の料とし、休閑作の法を茶畑に損失なく實行せしめ得べければなり。

以上の試育に供したる蠶卵は八月二三南日の内に孵化し、タッサア七八五、アトラス九七〇顆なりき、アトラス蠶はタッサア蠶の如く含育に困難ならすして少しく特性を異にすれども、初は南種共に同育し、數日の後アトラスの一部とタッサア蠶數頭をば取分て家蠶の如く棚を造り、ボムブ（Bombu）及荒麻子の枝を水鉢に挿入して飼養せり、然るに蠶兒の多數は技上にて緩慢しつゝ自體の重量を支へ切れぬ爲め、水面に落ち溺死し、八月二十六日に至りては殘値に二頭のタッサア及百十五頭のアトラス蠶を殘すに至れり、而してタッサア蠶の内一頭は中途死し、他の一頭は病蠶なりしか結繭の初に至りて斃れたり、然るにアトラス蠶の多くは規那樹サブ樹（Sa-ni）及荒麻子の枝上に結繭せり。

次て九月五日タッサア卵の他の一族は孵化したれば、今回は初より茶樹にて飼育し、約三週間の久しき頗る健全に發育

せり、然るに其後余は盛用ありて數日他出の止むを得ざる事あり、留守番をして之を猶當せしめたるに、不適當なる葉を給し、若くは汚れたる枝葉を以て飼ひたる結果多く斃れ、生存したるものは不幸にも他の飼料に移されたり、此試育に依りて得たる繭と、前回收めたる繭の繊とは、共に今一十二月五日〕羽化の際中にて既に交尾を了ったるもの第一回の作蠶分育に於て茶葉を飼料とし版の如き果あるべし、余は豫思せざりしも、此試驗に於ては後試回分育の度を重ねたるに、漸次密集に茶葉を以て飼育することを得、斃死の割合も減ずるに至らんと思考す。

印度に於てはサゾ樹の濃木林中にタッサア蠶を飼育し、色尤も薄き良繭を得ると雖も、錫蘭に於てはタッサア蠶は此樹にて飼養すること能はず、唯アトラス蠶のみ之を食し、其繭は總て黒味を帶ふるの傾あり、而して蠶見は常に軟かき葉を嫌ひ、稚齢の時も尚粗硬の葉を探むの性あり。

タッサア蠶の飼育植物に就ては、荒麻子葉を以て天然の好料なるか如き說あれとも、該枝葉は蠶見の創行に際して軟皮迄触し、其曲折に伴ひ落下するもの多きが故、自然の飼料とすること能はざるへし、蓋しタッサア蠶は其體量アトラス蠶に比して頗る重けれはなり云ふ。

清國柞蠶絲の產出狀況

大日本蠶絲會
通常會員　兒島定七

第二　盛京省蓋平及び牛莊

盛京省の柞蠶絲は多く蓋平に集散す、予は十一月六日同地の絲棧商勝德號に滯在視察せり、同地には絲棧多くして製絲家は尠なく、同地の利增和と云へる小製絲家に於て大枠製絲の方法を委しく觀察せり、而して同地絲棧に於ける調査に依れば、蓋平に壹ヶ年の柞蠶絲集散高は大小枠とを併せて壹萬擔なりと云へり、當時の相場は蓋平兩にて絲目拾匁に付き

大枠絲　上一匁八分　中一匁七分　下一匁六分
小枠絲　上一匁六分　中一匁四分五厘　下一匁二分五厘
大撚手　百斤に附　三十兩
二撚手　同　拾五兩

（大撚手、二撚手とは繭の屑絲にして大撚手は繊絲の際繭より引出したる上屑皮、二撚手とは繊絲中の雜屑にて繭も交りたるものなり）

此地は盛京省柞蠶絲の集散地にして附近の生產地は熊嶽域、龍家店、樓官鎮、四盆嶺等なりとす。

ここが此地方を騎在し、勢力を擅にし、盛京省中に於て適當なる土地を探定し、日清人の合同を以て製絲場を興すの最も利益あり、と說めらるゝに至り、而して芝罘に於て製絲場は蠶絲別製をもあり、營業上の便利はあれども關稅の弊あるを

とを恐れず、安東縣に於ては繭購入の便利あれとも、蓋し工に不便あらんと、蓋平及牛莊附近に於ては牛莊ダルニー間には海運の便あり、其他清國の港便あり、若し內地にして製絲會を爲さんには附近より最も適當なりと信じたり、而して營業上清人と共同を爲すを以て利便多しと認む。

牛莊（營口）

柞蠶絲關係に於て本港と蓋平とは、大東溝物產會社營松洋行等の日本人商會あり、同地に於ては絲及繭の取引を爲すの稍入なく、何れも蓋平に於て取引を爲し當地に於ては爲換社振出し等の手續を爲すものなり、本港昨三十六年の柞蠶絲及屑絲の稅關調査輸出高は左の如し。

柞蠶絲

同屑絲	五千八百六十七擔
	二千二百七十五擔

而して清國官衙の調査に依れば、盛京省當ヶ年の收繭額は四百萬千乃至五百萬千なりと云ふ（柞蠶繭の量定は千粒を一位とするの習慣にして則ち四十億乃至五十億粒なり）其半數一半は盛京省に於て製絲となし、蓋平又は安東縣へ輸送すと云ふ、然るに今是れを蓋平の集散高を牛莊の輸出高に比較し尚蓋平安東縣の集散高と、大東溝其他よりの繭輸出高を前記の總收繭高と比較すれば、左の如く大なる差異を生ず今參考の爲め左に是を掲ぐ。

牛莊の輸出高　五千八百六十七擔
蓋平の集散高　壹萬擔
此差　四千百三十三擔

蓋し此差は同地に於て繊物其他の用途をなすものなるか而かも尚其差の甚だ多きに過ぐるものゝ如し。

一盛京省收繭高　五百萬千個
此內
一蓋平の集散高　二百萬千個
但し蓋平の集散柞蠶絲を壹萬棚とし、百斤に付き繭二十萬個とすれば（繭百二十五粒を以て絲量拾匁を得るものゝ如し）則ち上の如し
一安東縣の集散絲高　六十萬千個
但し集散絲三千個とす、其割合前記の如し
一大東溝、大孤山、青淮子、等の輸出繭

	百二十萬千個
小計	三百八十萬千個
此差	百二十萬千個

何れを以て正確となすべきか此に斷言する能はずと雖も、以て其大略を知るに足る可し。

牛莊の輸出は冬期封河の爲め、毎年四月より十一月に止り十二月より三月迄は旅順より輸送せり。

第三　芝罘寧海及山東所見

芝罘に於ては製絲場大小數ヶ所あり、大なるは華泰榮豐の機械製絲、其他百人前後の工場を、營本年新設の工場四五にして止まらず、其中最も大なるは怡豐にして製絲、蒸氣、漂白、鉗、伸、比、他手撚の工場あり、相綿機の工場あり、糊附工場あり、絶築出來上りたる部分より鍍業せり、工事落

歳の上は雇工千人を要すと云ふ。資本金は五十萬圓の合資組織なり、其他本年新設に係る浴豎懲の工場も三百人取なりと云ふ。

予は事泰華豎を始めとし、同泰和、恒興絡、生成同、正祥公其他四五の工場を視察せり。

事泰華豎は製品は上海に送りて歐洲へ輸送すれども、其他は同一、神戸大阪に送り、悉く日本人の嗜好を知悉し、乾燥を加へ、「ひ」の改良を計り、鋭中同等和の商標を付し、其商標の日本人の嗜好に適するは其商標を日本人の嗜好に適するは其商標を日本人の嗜好に適するは其商標を

四十九萬二千六百五拾四圓
（百斤平均　三百九十四圓強）

右に依れば一昨三十五年神戸大阪輸入數量四十萬七千六百六拾八斤に比して非常の減少を示せり、而して神戸輸入の價格と京都輸入品の優等なるに依るべしと雖も、其懸隔甚しと云ふ可し、稅額は一定の規定に依ると雖も、其稅關に於ける申出價格の低位なるに依るならんか。

結　論

以上列記する所を概評せば、清國に於ける柞蠶飼育の將來即ち其盛衰增減の問題に對しては、予輩の後を少論の低落を來たすべしと信ずるとなり、何となれば元來彼の地の蠶業は燃料に供せらるる柞蠶飼育は其副產物なれば之を廢止するの理由なけれども、世間陸々の議論あれども、客年四月稅則の改正に依り從價稅壹割五分となり、百斤に付三拾圓五拾錢の稅金となれり、而して其輸入高は前項記すが如く三十五年に比して三十六年は著しく減少を現ぜり、之に依りて既に配せるが如く今や清國柞蠶を我れに輸入し、內地に製絲を爲すの必要なきは暫く其時機に非ざるを信ずるなり。

柞蠶用絲に於ては成るべく多數の輸入をなし、本邦に於て紡績用絲又は內外の織用に供する額を增加し、以て內外の需用に供する額を增加し、以て內外の需用に供するに資し、其輸入稅は減じ、又は無稅とならしめ、彼の輸出稅を減じ

繭を收穫すること得るなり。農家は自家にて蠶種の製造を爲す、故に製種の目的にて生繭の購入をなすことあり、

一千九百一年の調査によれば飼育者及繭買集人（飼育者以外）の數は合せて男一萬千〇八十四人、女四萬八十六人にして之に二萬九千八十六人の用鳥者あり、之にしかして見れば「ベンガル」地方に於ける蠶業に從事せるものは正に八萬千五十六人なりとす。

同地方桑園の反別は未だ不明に屬す。

桑樹栽植後二年にして一エーカルの桑葉は三百「マウンド」（一百二十ポンド）なるべく、之を以て生繭一百度の得ベし、故に一封度の價四十仙、我八十銭の譯なり。すれば四百八十弗（即ち我九百六十圓）を收むる譯なり。

従二位　平　時　高

とし毎に蠶ぶひの數よして
家のさかあの千世にぞへむ

芽枯病に就て

大日本蠶絲會
通信委員　野村彦太郎

本邦に於て桑病中其害の最も甚だしきものと來れば蚕の萎縮病、紋羽病、芽枯病の三種なる可し、而して第一種の病原に至ては今日の衆說生理的に、第二種の病原に至ては從來蠶類に一定せず、而かも第三種の芽枯病に至ては其害の激烈なるに拘はらず其病原に至ては一定の御說なきものゝ如し、伊國に於ても年々として多少其害に襲はざるなく、殊に千八百八十四年、千八百九十二年、千九百〇一年の如きは其惨害を極めたるとは既に歴史の證なり、是を以て伊國に於ては從來芽枯病に就て研究少なきにあらずと雖も近年に至る迄其病原に就ては確乎たる定說なく、隨つて其病原說に二種あり、一說は其病原を菌類に歸し、一說は其病原を氣象的に歸したり、此の如く其病原に二說あると雖も、從來に於ける菌類主張說は其立論の堅固ならざりしが爲めに、寧ろ其の病原を氣象の如何に歸するもの多かりき。

之を要するに從來に於ける芽枯病原の曖昧なりしは精密なる研究の欠乏に外ならざる可し、當「パビヤ」大學「プリヤシー」教授も「時病原を氣象の如何に歸したるとなきにあらずと雖も、獨逸「ファルネチ」助手と共に隧花植物實驗室に於ける研究の結果は、其病原を氣象の如何に歸するの不當なるとを知得し、千九百一年を以て其病原を菌類に歸するに省報告に於て桑條凋萎(Avvizzimento dei gelsi)の題名の下に其病原を記述せしも、結局其病原を氣象の關係に歸して曰く、厳冬に次く春候の不順なるに在りと。

千八百九十四年羅馬府植物病理實驗場長「クボン」氏は農商務省報告に於て枝條の枯死(Il disseccamento dei gelsi)の題名の下に其病原を記述したるも、結局「プリヤシー」教授の說に贊同したるに過ぎず、其說に曰く從來本病に襲る桑樹の枝幹葉に發見せられたる菌類は、死物寄生的に過きずして既に枯死したる部分に生せしものなり、若し假りに其菌類をして生物寄生的のものなりとするも此の如き大害をなす程に發達し居らざればなり。

終に千九百〇一年當「大學」花「驗」室「に」於「ける」「ボッチ」氏「の」桑樹條の凋衰の題名の下に豫「報」として、從來に於ける氣象的病原說の當なることを攻撃し、其病原を菌類に歸するの主當なることを發表せり。其大要は左の如し。

千九百一年には芽枯病に襲る桑樹殄に多數なりしを以て之を好期とし著者は之れが研究に從事せしに、桑條の芽枯病に襲るものは其條の枯死する直前には其表皮は一見健全なるも數時にして其條は凋衰し、或は其條の芽は全く發達を停止するに至りて判然病徴を認め得べしと。

而して發病熱は一ならずして桑條の中間に發見せらるゝことあり、或は其基部に發見せらるゝことあり、或は一枝の所々に散亂して發見せらるゝことあり。

桑條の健全の譯を往々ものに就て養者は精細に實驗せしに、一箇或は數個の芽を總括して取卷く其周圍の表皮は紫褐

色に至れり。

以來今日に至るまで伊國に於ては其說を信ずるのみならず、其立論の如きも至當となすものゝ如し、故に予は從來に於ける芽枯病研究の始末を報告し、終に臨みて當實驗室に於ける其研究の一端を報するも强ち不必要の事にもあらざる可し。

伊國に於て始めて芽枯病に就て論述せしは「バッセッリニ」氏にして、同氏は千八百八十四年桑樹霧病(Nebbia dei gelsi)の題名の下に緻條の枯死に就て記載したり、其說に據れば本病は枝頭より發病して次第に其基部に波及すると共に葉は凋萎して黒變し終に全枝は枯死すと、而して同氏は其枝の表皮に發見する菌類を以て其病原とせり。

是よりして「サッカルドー」氏、「クヂニ」氏、「チベルリ」氏、「グリフィン」等の諸大家輩出して其菌類の研究に從事せしも、果して生物寄生的のものなるや換言すれは其菌類は之れを病原たるやを明示し能はざりし。

一方に於て「ベッチッヒ」氏、「ポッヂー」氏出て其病原に就て研究し結果、其病原を桑樹の地上部の蒸發と其地下部の吸收との不平均に歸したり。

千八百八十五年「ペルレセ」氏出て、既往に於ける芽枯病の顚末を自己の著書なる桑樹寄生植物病論(Le malattie dei gelsi prodotte dai parassiti vegetali)に掲げたる後自己の說を述へて曰く、予は寧ろ「ベッチッヒ」「ポッヂ」兩氏の說に贊成すと、

千八百九十二年當「パビヤ」大學「プリヤシー」教授は農商務

色或は褐色に變して脱落し多少稍圓形の輪紋をなせると、而して中央に芽を取り寄く輪紋は其條の延長するに隨ひて二個以上の節間を害するに至ると、然れども其輪紋の短きときは其條の延長するに隨ひ其條の全周圍を取寄くこと多しと、且つ曰く甲種の害狀をなすものは輪紋より以上の條は多くは枯死すと云ふ。

輪紋の中央にある芽は春に至るも發芽することなくして枯死すと、而して是より上部の條は一時の間は發達するも日ならずして其生長を遏止すると共に凋衰して枯死するに至ると、時によりては一見輪紋を欠之する遊所の條の凋衰することあり、換言せば外觀上健全なる桑條にして枯死することありと、其理由に就ては著者は左の如く說明せり。

此れ桑く桑條の基部に黑變したる輪紋を有するか故に、全條は健全を粧ふものなりと。（此の如き病狀を呈するものは本邦の根刈仕立の桑樹に多き、かゝる、果して伊國ものと同一種なるや否やを研究すること最も肝要なり）

概言せば一年生の桑條に在りては本病に罹ること多けれども、二年乃至三年生の桑に在りては極めて稀なりと。

芽を取寄く輪紋の部分を解剖するに、其材部は枯死して外部に位する組織は黑變せるか故に形成層は既に枯死せりと。又芽の外觀健全にして而かも輪紋より遠ざかるものにありては、桑く其組織には變狀を呈せざるもの多しと雖も、或る芽にありては外觀健全にして其組織には變狀を呈し黑變の傾向ある者を發見すること難からすと、而して此の如き黑變する組織は前年の葉の落ちたる痕に接する處若くは葉痕と芽の中間にして、例之は芽鱗の內層にして形成層にまで其の黑變の侵入するを見得しと。

右に述ぶるが如く輪紋を帶ぶる組織は勿論、黑變の傾向ある組織（其芽は外觀健全を粧ふ）には菌絲は其組織を貫通して形成層に迄波及せり、茶者は精細なる方法に由て其菌絲を取り出して再三之を培養せしに後に至りて芽胞を生せり、之を輪紋の表面に生するものに比するに其間には決して差異を見さるのみならず、又一方に於ては其純粹培養したるものを健全なる芽に接種せしに其芽は發病したり、換言せば其菌絲は芽中に侵入し其組織は黑變せりと。

故に著者は結論して曰く Fusarium lateritium は桑樹「パンヴォンヴュー」柳樣等には、死物寄生の狀態をなして生存することあるも、ときにあらずして鏈しとの其枯餘の如何にては右に述ぶるが如く生物、寄生に變ることを證し得べしと。

右の試驗に徵するときは佛人トルバッ氏は千八百三十八年に桑幹に於ける病害の研究（Notes sur une maladie qui se développe sur les tiges vivantes des mûriers multicaules et plus particulièrement sur celles du mûrier à feuille blanche）に係る菌類に一致せり、何となれば同氏は既に Fusarium lateritium は桑樹に於て生物寄生的の害をなすことを證明したればなり、而かも同氏の記載する處の徵候は芽枯病の徵候には一致せざるなり。

子は故に曰く「トルバシ」氏か論述せし桑病は、予か曾て東京蠶業講習所內の桑園に於て實驗せし桑病に一致するもの、如し、果して同一種なるや否やは他日の精細なる實驗を俟たざる可からず。

右に述べたる當隱花實驗室に於ける芽枯病の研究は千九百一年に發表せし豫報の概要にして、其の精細なる研究の始末に至りては不日發刊せらるゝ筈なれば其節重ねて報告す可し。

然れども茲に一言を加へべきことあり、予をして云はしめは、右の菌類に由りて右の病徵を呈することなれども、他種の病原に由りて之に類する病徵を呈することなしとも予は未だ斷言し能はざるなり、何となれば「ベッリッヲン」氏は既に桑樹細菌論に於て之に類する桑病を記載すればなり。故に今後は一層精細なる研究を俟たざるを得ず。（パビヤ大學隱花實驗室にて）

柞蠶絲に就て（承前）

大日本蠶絲會
技師委員　農學士　中村彦

第四節　柞蠶天蠶絲の製造地及產額

本邦に於て重要なる柞蠶及天蠶絲製造地は長野縣南北安曇兩郡にして、既記の如く茨城縣產繭も大概此處に運搬せられて繰絲機械に上るなり。

左に南北兩安曇郡に於ける柞蠶及天蠶絲に關する統計を掲ぐ。

柞蠶絲

	製絲戶數	釜數	製造所	職工
	自宅	自宅		自宅
明治三十四年	一一〇	四七〇	女四二八 男	一四
明治三十五年	一二二 五	四二一 一四	女四二八 男	一四

	同上一貫目の價格	屑物	玉繭一貫目の價格	絲	同上一貫目の價格
明治三十四年	二八〇〇	二五六	九〇〇	一	
明治三十五年	三三〇〇	一四〇	七五〇	五〇	二〇〇〇

天蠶絲

明治三十四年	七八	四	三二	一一	男	三二	一一
明治三十五年	七〇	三	二九	九	女	二七	九
明治三十四年	二一一	五三〇〇	五四	二〇〇			
明治三十五年	一三〇	四七五〇	五二	一七五〇			

以上は南安曇郡の分にして前表に據れば。

	柞蠶絲百斤の價格	天蠶絲百斤の價格
三十四年	四四八圓	八四八圓
三十五年	五二八	七六〇

北安曇郡の分は左の如し。

		製絲戸數	釜數	職工 男	職工 女	製絲産額	同上一貫目價格
三十四年	柞	一一	三四	—	三四	三八	二五圓
	天	四	一六	—	一六	一四	五〇
三十五年	柞	一一	三二	—	三二	三六	二五
	天	五	一八	—	一八	一四	五〇

前記兩郡の統計表に據れは柞蠶絲及天蠶絲の産額は。

	柞蠶絲	天蠶絲	計
三十四年	六二三	二二六	八四九
三十五年	四〇一	一四四	五四五

作蠶及天蠶絲の産額果して斯く小額なるや否や、少しく疑なき能はす。

南安曇郡東穂高村に株式會社穂高商品問屋なるものあり、同社の資本金は三萬圓にして問屋及中立を營業とし、專ら柞蠶絲天蠶絲及家蠶絲を取扱ふ、左に同社か最近二年間に取扱ひたる柞蠶及天蠶絲の數を擧く。

	柞蠶絲	同上百斤價格	天蠶絲	同上百斤價格	計
三十四年（自卅四年六月一日 至卅五年五月卅一日）	四四二	春四八八圓 秋四二八	六二	九六〇圓	五〇四
三十五年（自卅五年六月一日 至卅六年五月卅一日）	一八〇	春五二八 秋四一六	二七五	八〇〇	四五五

（備考）三十四年は天蠶違作、三十五年は柞蠶違作

同社重役の談に據れは同社の取扱ふ柞蠶、天蠶絲の數量は全産額の七割以上を占む、而して前記二年共に作柄不良にして平年は約此の倍額を製出すへしと、果して然らは少なくとも毎年の平均作蠶絲七百貫天蠶絲三百貫合計千貫の産額あるものと見て大過無かるへし

第五節　製絲法

製絲は總て器械製にして「ケンネル」式なり、動力は水力を利用し到る所水車の運轉するを見る、製絲工場は縣稅賦課の關係よりして三人繰多數を占む、最も大なるものも漸く十五人繰に過きす。

繭は繰絲に先ち殺蛹す、殺蛹法は普通家蠶繭に行はるゝものと畧ほ同しく、溫度は柿の葉を殺蛹すへき繭の上に置き、其の乾燥して粉末となすを得るに至るを度とす、之れに要する時間は約二時間なれは、一晝夜に十二回繰り返すことを得へし、而して此の殺蛹乾繭法は同一の繭に對し二回宛行ふものとす。

製絲法に就ては別に家蠶繭のものと異なること無く、只柞蠶繭は繰絲に先ち三時間位蒸し、天蠶繭は家蠶繭に比し、煮繭に稍長時間を要するのみ、然れとも明治十五六年頃に於ては繰絲法に就き大に困難せるものゝ如く其の狀況は左の記錄により察知するを得へし

柞繭の絲を繰製するは甚だ困難にして殊に秋繭は其解舒宜しからさるが故に從時當業者の頗に苦慮する所たり、余是に注意すること久しく數回の試驗を經て漸く容易に繰絲するの法を得たり、蓋し此繭の質たる多量の護謨分を含み其堅硬なること本邦山繭の比に非す、故に繰製の法も亦大に異ならさるへからす、今左に余が經驗せし方法の三四を列記し以て諸君の參考に供し併せて識者の明教を乞ふ。

第一回試驗　重炭酸曹達二匁を白湯五合に投下し、之を沸騰せしめて繭五顆を入れ煮ること二時間にして緒未だ解けす、再び煮ること三時間にして試むるも猶ほ緒を索むることを得ず、絲質少しく損して強力を減し充分の眞絲を製出するを得ず。

第二回試驗　馬耳塞石鹼二匁五分を白湯五合餘に投下溶解したる後、繭五顆を入れ沸騰せしむると三時間餘に亙るも未だ解舒せず、依て其儘靜置し翌日再び沸騰せしむること一時間にして緒を求めしに、第一回の試驗に比ふれは較扱ひ易かりしと雖も、多く時間を要せしのみならず固有眞質の絲を得ざりき。

第三回試驗　繭を湧騰に盛りて蒸すこと凡そ一時間、後水に浸し置くこと一夜にして翌日取り出し、又之を馬耳塞石鹼を投下したる沸騰に入れ煮ること一時間にして緒を索め繰製せしに、第二回の試驗と大差なかりき。

以上三法を施して試驗せしも未だ充分に目的を達するに至らざりしを以て尙ほ熟考するに、此繭の絲は前記の如く頗る多量の護謨分を含み其組成堅固なるが故に、熱湯に投下て急煮すること數時間なるも容易に溶解すること能はず、强て之を繰製せんか却て絲質を損するの恐あるを以て繭は數種の法を試み、初めて前法の如く湯の溫度を高くせずして浸漬の時間を長くするの最緊要なるを知り得たり、依て第四回の試驗に於ては稍好結果を得、第五回の試驗に於ては遂に充分に目的を達するに至れり。

第四回試驗　馬耳塞石鹼を溫湯凡そ一升に溶解して土鍋に入れ、繭十顆を投して能く攪拌し、華氏二百十度の溫にて之を煮ること二時間、其後靜置すること四晝夜にして繭を取り出し、白湯を以て洗滌し且湯を換ふること三四回にして後百二十度の湯中に入れ緒を求め繰絲せしに甚だ容易なりき。

第五回試驗　馬耳塞石鹼一匁五分を溫湯七合に溶解して土鍋に移し、繭五顆を投して能く攪拌して沸騰せしむること五十分間、其後靜置すること五晝夜にして繭を取り出し、白湯を以て洗滌し湯を換ふること二三回にして華氏百三十度の湯中に投下、緒を求め繰製せしに亦頗る容易なりき、其詳なることは左表を製て知るへし。

（備考）以上の試驗は冬期に於てせしものなるを以て夏期に行ふには宜しく斟酌するを要す、又第一回より第四回に至る試驗表は畧して揭けず。

柞蠶一粒製絲試驗表（繭は明治十五年秋期東茨城郡竹原村に於て收めたるものなり）

審査項目	第一	第二	第三	第四	第五	平均
繭の量(繭共)	四匁二分	三匁九分五厘	三匁五分	三匁六分八厘	四匁八厘	三匁八分八厘二毛
製絲の量	二分三厘四毛三	二分四厘八毛五	二分五毛九	一分九厘一毛七	二分三厘一毛	二分二厘二毛二八
屑絲の量	七厘	七厘	六厘七毛	四厘八毛	五厘六毛	六厘四毛
「デトロ」の量	五デニール七三九強	七デニール六九二三	五デニール九一九三強	五デニール二九一四強	六デニール四六七九強	六デニール二二二五二強
検尺器の回數	千百五十回	千四十回	九百八十回	千二十回	千六十回	千五十回
本邦尺に換算したる數	四千五百八尺	四千七十六尺八寸	三千八百四十一尺六寸	三千九百九十八尺四寸	四千百五十五尺二寸	四千百十六尺
試驗中切斷の數	五	四	六	四	三	四、四
検尺器四百回に付纇節の數	四	六	五	二	四	四、二
繭一升の顆數	六十五顆	六十五顆	六十五顆	六十五顆	六十五顆	六十五顆
繭一升の絲量	十五匁二分二厘九五	十六匁一分五厘二五	十三匁三分八厘三九	十二匁四分六厘五	十六匁一厘五	十四匁四分四厘八二
一顆繰絲時間	六分	四分	四分	五分	五分強	四分八秒

（明治十六年三月發行大日本農會報第二十一號通信欄掲載炭焼鉄東炭城郡水戸上市森田眞雄）

明治十六年高知縣共進社にて柞蠶繭の製絲法を發明せしとて同縣勧業課日報に左の記事あり

繭一千個に付

水三升
石鹼四匁
馬鈴薯搗二匁

右の割合を以て繭を煮るに最初水三升を沸騰せしめ、已に沸騰せんとする際と雖沸りの繭を一時に投じ、少しく火氣を弱め繭を吃て過り合せる時に熱湯となる上を下、下を上へ攪拌して前一時間を經たる頃先きに石鹼を入れ、又三分間も煮て然る後馬鈴薯搗を投ずべし。但馬鈴薯搗を投じたれは煮て間て後に絲を繰上繭の冷却するを迅速とす、又藥品を投ずれば其度毎に繭を上（下に攪拌し藥の溶解を易からしむべきことなり、沸騰減は漸減せざる位の温度を以て適當とす。

製絲するもの程右の如くして煮たる繭を沸騰せんとする際の入れたるも仮の度なり）而して他の大鍋に自湯を準備し置き、其傍ひたる頃桶繭鍋に其自湯を入分百位迄沸入れ、明して之に温めたる繭を五十個乃至七十個許り宛入れて繭鍋等に預ケ立て置き適當の時に製するものなり。

製絲鍋の湯は一日に一度宛入れ替れば宜しきものなり、但冷（さめ）難に注意すべし、最初繭を煮るに臨てときは繭の大小屈湯等を預分け不揃きものを一度に煮なべきことなり、然せざれば煮へ加減の一樣ならずして繰の揃り悪きものなり。

絲量は繭一升に付柞蠶七匁位天蠶八九匁位とす、而して繰絲量は上等工女は一人一日四十匁乃至五十匁、並等のもの三十五匁内外なり、繰絲の難易を云へは春柞蠶繭最も易く、天蠶之れに次き、秋柞蠶最も難し、挽賃は大約左の如し。

種類	柞蠶繭	天蠶繭
挽賃三百匁即ち繭四千粒の挽賃	二・五〇	三・五〇

出殼繭

繭を煮て繰絲するには豫め蛾の破り出たる口に鶏卵の蛋白質を附け陽乾す、製絲は大概五六粒附とす。

第六節　柞蠶天蠶絲の價格及販路

柞蠶天蠶共に五十粒を以て生絲一捻（重量約四匁）とし、八十捻を以て一括とす、即ち其繭數は四千粒にして重量は約三百十五匁なり、最近三ヶ年に於ける一括及百斤の價格は左の如し。

一括の價格

年	柞蠶絲	天蠶絲
明治三十四年	八〇〇	一七〇〇
同　三十五年	八・五〇	一五〇〇（四五・〇〇） 一六〇〇（八〇〇〇）
同　三十六年	一一・五〇	一五・〇〇

（備考）秋柞蠶絲は柞蠶絲に比し價格二割廉なり

百斤の價格

年	柞蠶絲	天蠶絲
明治三十四年	一六〇〇	四一三〇〇
同　三十五年	一六・五七	四五・〇〇
同　三十六年	一五・〇〇	五九三・〇〇

年	柞蠶絲	天蠶絲
明治三十四年	八〇〇〇	八七七〇〇
同　三十五年	八〇〇〇	七七〇〇

（備考）秋柞蠶絲は柞蠶絲に比し價格二割廉なり

絲質と桑畑土壌との關係、排水良好なる桑畑に於て收めたる繭より繰りたる絲は、然らざるものに比し品質特に光澤の點に於て佳なり。

日本產と支那產の柞蠶絲比較、日本產柞蠶絲の價格は既記の如く年に依り異なれども、近時の相場は中等品の價格百斤に付五百五十圓にして、支那產柞蠶絲は同百斤に付三百三十圓なり。

斯の如く兩者の間價格に大差ある所以のものは、支那產柞蠶絲の再繰容易ならず、類節の夥多にして艱度の不齊なるとと、茨域縣の如き薪炭用を目的とせる樵畑に連年柞蠶を放養することを厭ふ所以のものは、柞蠶の新芽を食べ盡すこと甚だしく殘葉を生ずること少なき爲、樹の發育不良なるに至るを恐るればなり。

販路、春柞蠶絲は新潟、愛知、岐阜、京都、及栃木（足利）へ、秋柞蠶絲は京都及愛知へ、天蠶絲は六七分は足利に、他は京都府後、岐阜及廣島へ輸出す。

第七節　柞蠶絲を使用する織物の種類及價格并販路

柞蠶絲の用途に就ては既に述べたる所あれども、今長野縣下に於ける柞蠶絲使用の織物を掲げんに、南北安曇郡内に於て柞蠶絲を使用する機業家は僅に南安曇郡東穂高村に臼井工場、有明村に千村工場あるのみ、而して後者は極めて小規模なり、臼井工場は絲綿共に土產の柞蠶絲を使用し、幅一尺八寸の綾織物を織出すること毎年七百匹に上る、此織物は在横濱ストローム商會及茂木商店の注文にして英國に輸出するものゝ如し、一匹の重量は三百匁其價格は十八圓なり。

同縣上高井郡須坂町須坂織物株式會社に於ては、日本天蠶絲を經絲に清國柞蠶絲を緯絲に使用し、暢順牽用地を製造し本年已に五百匹を東京へ輸送せり、其の價格は自匁に付四圓五十錢なり。

第八節　結論

柞蠶絲の用途が強伸力に乏しきに因るものゝ如し、或論者は支那に於ける繰絲法の本邦と異にして、湯繰りならざるを見て練減量の多額なるを云々するものあれども、横濱生絲檢査所の檢査成蹟に據れば左の如し。

繭類重百匁比例

種類	繭類重百匁比例
芝宗華器械絲	一六・六七
横浜清水組絲	一七・二二
同　糸絲	二一・九九

（備考）日本產柞蠶絲の練減檢査成蹟書を以て明治二十九年横濱生絲檢査所檢査開始以來生絲の五ヶ年間の練減檢査成蹟を掲げて參考と爲す。

練減量百分比例表平均

種類	練減量百分比例表平均
同上最多數	一六・五七
同上最小數	一九・七六

天蠶繭

天蠶絲は柞蠶絲に比し不潔なる理由、天蠶絲は柞蠶絲に比し彈力に富み且其光澤優美なり、故に京都絹生の機業家は浮織に使用し、又茶に染るときは其の光澤特に佳良なるを以て、婦人の丸帶の光り絲には必ず用ゆと云へ、又飼育上に於て天蠶には保護管理上意を用ゆること深く、柞蠶の如く放任すること無し、今其異なる一二の點を擧ぐれば。

一、天蠶は柞蠶に比し一定の樹畑に對し、蠶種の放養量を少くす。

二、天蠶は葉を食するに樹の中部より上、柞蠶の如く新芽に富める上部よりすることなく殘葉を生ずること多し。

三、天蠶は柞蠶に比し性虚弱なるを以て蔟收病に罹り易し。

以上述べたる如く長野縣人が遠く茨城縣下に出張し、桑園の飼育に從事するの一事、已に作蠶及天蠶の飼育に於ては、其の成績の良なるは、實に其の利益あるを知らしめたるの足るべし、然るに今日に至らざるは所謂以て其の地方に廣く行はるるに至らざるは、當局者が明治初年の失敗に懲りて之が奬勵を怠りたるもの、當業者が其の事業に熱心なるの結果なるべし、講ずるは非ず。明治初年失敗の原因は已に沿革の部に述べたるが如し、請ふ少しく當業者の斯業に熱心ならざる點を指摘せしめよ。

一、「南北安房郡」郡に於ては、人口漸く增加するに從ひ、「人家に接近せるものは次第に開墾せらるるも、尚山麓地方には幾多の飼育の用に供すべき桑及檜林あり、而して其未だ利用せられざるは主として蠶種の價格不廉なると、且得難きと、に由るなり、然るに蠶種製造の業に從事し、其の供給の途を講ずるものあるを聞かず。

一、各小製絲場は協同一致するもの無し。從て蚕も製絲の品位の一定に戮き注意すること無し。

一、「飼育上製絲上共に技術の點に戮き改良を企圖するもの極めて稀なり。

一、「飼育上」の點に於ては、「南北安房郡」に於ては、「人家に接近せるもの」は次第に開墾せらるるも、尚山麓地方には幾多の飼育の用に供すべき桑及檜林あり、而して其未だ利用せられざるは主として蠶種の價格不廉なると、且得難きと、に由るなり、然るに蠶種製造の業に從事し、其の供給の途を講ずるものあるを聞かず。

一、「蠶種」の供給者は北安房郡に於ては現に製造の業に從事するもの稀なり

欲する場合の如き是れなり、彼の樹皮の下(穿孔蟲)或は藝幹の内部(木蟻蟲、鐵砲蟲、吉丁蟲等)或は果實の内部(果蠹蟲、象鼻蟲)に生活する昆蟲の除害口即ち其造例として、又一般に地中の害蟲、根蚜蟲、蟻、針金蟲等)の驅除及び病害にありては柔黄病、樹腫病、瘤病、隨蟲病等の豫防の困難なることは共に同なり、要するに總べて此等の蟲害及び病害に對して前に記したる除害法は何れも唯一種の緩和法たるに過ぎず、此等の除害法は其根帶に於て唯一種の緩和法たるに過ぎずして或期病害の發生を一時抑制するに止まるに反して植物をして強壯ならしめ病蟲害に對する抵抗力を增加せしめ又は植物の生理上に於て植物の生理作用に於て亦外科的療法の一種たる內科療法は其應用甚だ廣汎なるに反して植物の內科療法は其應用甚だ廣汎なるに反して植物の內科療法は其應用甚だ廣汎なるに反して植物の

第一圖

第二圖

第三圖

、、、

學說を大に異にする處あるを認めたり、今左に研究實驗の大要を記載して識者の批評を仰かんとす。

軟化病蠶の消食器内には如何なる細菌の存在するものなるやを調査し、桑葉に附着するもの及健蠶の消食器内に存在する細菌と對照を試みんと欲し廣く軟化病蠶の採集をなし、細菌の分離培養を行ひしに異種のものなりと認めたるもの十九種を得たり、又桑葉に天然に附着する細菌の分離を試みたりしに異種のものなりと認めたるもの十五種を得たり、茲に於て之を軟化病蠶より分離し得たるものと對照せしに或二三種を除くの外相一致するを認む、又之等細菌を健蠶の消食器内より分離し得たるものと比較したるものとを對照するに大多數は赤克く相一致するものなるとを認めたり、是蠶兒の食桑には如斯天然に數多細菌の附着し居るを以て常に蠶兒は此等細菌を自然添食しつゝあるが故に健蠶と軟化病蠶との別なく同一種細菌の分離し得らるゝなり、又桑葉より如斯細菌の分離し得らるゝは是れ空氣中に浮遊する細菌の附着したるものなり、されば如斯分離培養によりて得たる細菌の相一致するは決して怪しむに足らず。

以上の如く軟化病蠶及桑葉より得たる細菌、又た空氣中より採集したるもの、尚ほ他に犬腸菌、野鼠室扶斯菌及土壌中より得たる亘大菌等を種々の方法により蠶兒に充分添食せしめ健康を害するものありや否やを試みたりしに、卒倒菌以外に蠶兒の健康を害するものあるを認めざりき。

軟化病蠶の調査を左に當り先づ其胃液を鏡檢せしに、健蠶の胃液は酸性にして、然るに軟化病蠶の胃液は酸性を呈せざるものあるも、其酸の程度は健蠶に比し弱きものなるを認む、然れども間々病徴等しく病勢も亦同一程度なりと認むるものにして、甲は消食器中細菌の多數に存在するを認め、乙は健蠶の胃液檢査に於ける如く殆んど細菌の存在を認め得られざるものありたり。

又軟化病蠶の胃液を定性せしに澤村博士所說の如く軟化病蠶の胃液は健蠶の胃液に比し一般に「アルカリ」性反應の微弱にして亦稀に、「アルカリ」反應を呈せざるものあり、茲に於て余は軟化病蠶の胃液中細菌の存在を認め得られざるものゝ胃液の性に就き特に注意して調査せしに、細菌の存在殆んど認め得られざるものと雖とも亦変化性し「アルカリ」反應の微弱なるを認めたり、由是觀之軟化病蠶の胃液變性は細菌の繁殖以前に起る細菌の存在と關係なるが如し。余が研究成蹟の諸學者の說と異なる處實に茲に存す。

澤村博士の試驗成蹟によれば軟化病蠶の胃液變性を單も蠶兒の消食器内に繁殖したる細菌の生產したる酸の爲めに中和せられ變性し、又其酸及「アンモニア」の中毒によりて軟化病を惹起するものならんと云ふが如し、由是觀之消食器内に細菌の繁殖するにあらざれば胃液變性して軟化病を起すことなく胃液の變性の原因は細菌の繁殖に基くものなりと云ふに似たり。

細菌の多くは健蠶の胃液に相當する「アルカリ」程度の人工培養基に培養するも繁殖甚だ微弱にして中性に近ひ繁殖佳良なるものなり、由是觀之胃液變性したるが爲桑葉と共蠶兒の消食器に入りたる種々の細菌を茲に其機を得て繁殖したるものなることを想像するに足らん、而して如斯胃液

の變性せるものにして細菌の存在を認め得られざるものあるは、恐らくは胃液變性の急激なりしが爲め鏡檢當時未だ細菌の繁殖するに至らざりしならん。

試に卒倒及其の胞子を多量に蠶兒に語食せしむるに二三時間にして斃死するを見る、時は僅に二時間檢査するに蠶兒の胃液中に入り衰弱するを見る可し、又鏡檢と同時に胃液の定性をなすに「アルカリ」反應を呈せざるに至るものあり、然るに胃液の和性は卒倒菌の生産したる酸の爲めに中和せられたるものなるを見る可し、然れども胃液の和性は必ずしも酸の爲めに中和せられたるのみに決して非ずして或は組織を侵害する毒素の爲めに中和せられたるものなるを認めざるなり、是れ卒倒菌の外に附着する其他の細菌の衰弱するに至るものなるを認めざるなり、然れども卒倒菌の果して胃液を變性するや否やは未だ詳かにせざるなり。

胃は充分なる作用をなすと能はずして「アルカリ」程度の胃液は即ち不健康狀態の胃液なりとす、然れども消食器内に數多の細菌の存在するが故に蠶兒は、茲に在生活機能を害されて健康を失し、其結果として或は胃腸の諸器を侵害し或は胃腸の衰弱を來し、茲に細菌は此の機に乘じ始めて繁殖するに至るものなる可し。

次に病蠶が桑葉を食するときは其桑片の消食器中にありて褐色を呈することを多し、之れ胃液の「アルカリ」程度衰弱したるが爲めに食桑の消食器内にありて異常醗酵を起したる所以にして、彼の空頭蠶の如き褐色透明となるは即ち異常醗酵を起したる液汁の存在するが故なる可し、之荷ほ桑葉を「フラスコ」中に入れ之に氷を加へて熱するか、又は之に稀釋せる酸液を加へ熱するときは其煮汁褐色を呈す、然れども之を酸に換後を稀釋する「アルカリ」液を加へ前と同法により加熱するときは其煮汁は鮮綠色を呈す可し、是「アルカリ」の有無如何によりて然るなり。

（未完）

絲況

横濱市場

皇軍凱歌の征途に上り、虎煙、血雨、満蒙の野を覆ひて、よろづ以來、百般の實業上に著しき影響を與へたるのみならず、世界列國又幾分の波動を感ぜざるものなく、殊に極なるべし、而して我蠶絲業上に於ては全體の關係、運輸の利便及保險の増率等素より多少の影響なきにあらざるも、其大部分は我蠶絲業は無疵の最も繰糸に適するを以て、此場合に於ける我蠶絲業は無疵の好位置に在るものと謂ふべく、其第一の基礎に在りては露國の敗戰を傳ふると共に、取引所の如きは大恐慌に陥ることなし、經濟界に陥りからざるも、其影響を受くること、必竟一時の波動たるに過ぎざるべく、歐洲に於ける細布の需要の在らん限り、我蠶絲の販路は止まらざるべきなり、製絲家たるものは、戰時の局面に對し、敢て深く前途に疑惑の念を抱くの要なく、安に以て事に從ひ、精意勤勉、質の整理改善を圖ると共に、事業の堅固を企畫せられんことを切望に堪へざるなり。

而して二月中に於ける横濱市場の狀況は、其上旬に於ては時局問題益々を傳ふるより成行を眺め市面捗々しき取引なく、中旬に入りては折返五圓高の取組あり、次て市面活氣を呈し多數の取引圓滑に行はれ、價格亦五七圓高を報じたり下旬に入りては再び沈靜に復し、當用口の取引あるに過ぎざりし。

今左に生絲集散表を掲げて參考となさん。

明治三十七年二月一日自至三十九日生絲集散表

品目	持越	入荷	賣了	地力積民	輸越
器械	一九、〇四〇	二、四八一	七、五九六	三八五	一三、五四〇
生糸	四、一四九	一〇〇	一、三一四	一七三	二、七六三
撚糸	一、〇一〇		四〇九		
雑絲	七	一九		一六一	七三
屑繭				五九	三
合計	二四、二七二	二、八九九	九、三一九	七七八	一七、〇七三

備考

一、表中東位個は九貫匁を指す。

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査、輸越とは本月より翌月に輸越すべきものにして本月末日の調査に係る。

三、前月分の輸越と本月分の持越と其數一致せざるは商議中のものありしに係る。

四、機織其外に商議中のものありと知るべし。

五、寡子米國に輸出せるものは三千五百十九俵にして歐洲に輸出せるものは一千三百九十二俵なりとす。

但し一俵は十六貫目なり。

本月中最も高價に賣行きたるものは、伊勢度會製絲太の一千五十五圓にして、最低價は岩代共同二馬折返の八百八十圓なりとす、今最高價に就き前月及前年に對照すれば左の如し。

明治三十七年二月一日自至三十九日生絲集散日別表

日次	平目	入荷	賣了	引渡	輸出	地積民	産名	社名	刻印	最高値	最低値	備考
一日	一九	八九	一九	二九	二六	五三	美作	厚生	馬	一〇〇〇	九七〇	相場に先以て盛りなく取引は小數に過ぎざりし
二日	二七	二七五	八七	二五三	一二	八	岩代共同	二馬	十	九七〇	八九〇	
三日	二八	一四二	一四九	三〇一	二三	八	上野甲	補製	絲	一〇四〇	九七〇	一層注目せしも商議なかりし
四日	一七	一七七	三二八	五二六	七三	一〇	伊勢上	二田社	二	一〇四〇	九七〇	引續き靜にて當用口の買に過ぎざりし
五日	一七	一七六	一〇六	一九四	七三	一九	信濃	繊製	絲	一〇四〇	九八〇	佛々當用口へ商ひ出來せしが氣勢に欠如なりし
六日	七八	七八	三七	三二二	一八	四一	岩代共	築製	十	一〇四〇	九八〇	多少買氣ある向も一般見送りの姿なりし
七日	五十					三五	同二	製	馬	一〇〇〇	九八五	時節柄相場は落々強々傳ふるより新規商議なかりし
八日	七〇	五四	一七三	二二	四三	四五	信濃	盛製	絲	一〇〇〇	九七五	日柳日
九日	二一六	一四〇	一〇〇	一八	四三	四	上野天	細谷	製	一〇〇〇	九七〇	
十日	一五一	一四一	九			四	伊勢	明社	絲	一〇〇〇	九七〇	雪降三
十一日	一三六					四	信濃	金	製	一〇〇〇	九七〇	塩谷
十二日	七四	二二九	一〇五	二六	八六	四	岩代共	二馬	馬	一〇〇〇	八六〇	常陸石
						一八	信濃	明社	絲	九六〇	八六〇	三河三
						七	美濃北	金	製	九八〇	九〇五	美濃北
						三河	岩代共	二馬	絲	九八〇	九〇五	大祭日

折返し絲は前値より五圓高他は強然たりし

生絲最高價月別前年對照表

明治三十七年		明治三十六年		價格差
一月	島根郡平田製絲太	一、〇九〇	横濱製絲	一、二二五
二月	三重郡度會製絲太	一、〇五五	塔王製絲	一、二〇〇
				六五

十三日	二四四	三五	一三九	—	八四	—	飛彈／岩代	杉中製絲／共同販賣	+C	九五〇／九一〇	總て沈靜不味の商況なりし
十四日	一〇七	—	—	—	—	六四					日曜日
十五日	二四	一七八	一〇二	—	—	七	伊勢／美作	度會製絲／永盛社	□□	一、〇五五／九四〇	相場は休日前に比し多少安直の方なりし
十六日	一六八	六六四	一七〇	—	一七一	—	信濃／美濃	松城館／紳琵館	□□	一、〇二〇／九一五	新規入電ありたりと見へ折合ひたるもの纔ひ出來せり
十七日	二九	一、〇三九半	四一五半	一三	—	—	丹波／信濃	芦田製絲／長香社	□□	九八〇／八九〇	適當品商ひ出來し二圓半位好直のものありし
十八日	一七	一、三一三半	五〇九	一九	—	八	伊豫／岩代	丸城製絲／協立二人組	+□	九三〇／八六五	新規注文殆したるにや多數の商談あり相場幾分か高直なりし
十九日	三一	一、六六八半	三七九半	四五	七五三	四	近江／信濃	八幡製絲／東英社	□□	九八〇／九〇二半	引續き商談行はれ相場も五七圓方引締れり
二十日	二	八四三	七六一	八五	三七八	八	羽前／但馬	東郡社／但馬共同會	□□	一、〇二〇／八八五	買氣續き居りて相場は何分か高直の取組出來せり
廿一日	二七	—	—	—	—	—					日曜日
廿二日	二	二八二半	一、二八〇半	三三〇	—	六一	伊豫／信濃	鬼城館／龍上館、財	□□	一、〇二〇／八九〇	注文口は大抵買入れを爲せし爲か捗々しき商談なかりし
廿三日	八一	三一五	九三九半	三八一	—	—	伊豫／信濃	伊豫製絲／攝益社	□□	一、〇四〇／八九〇	前日同樣變りなく折合たるもの手合出來せり
廿四日	九二	二一〇	四四七	一〇八半	一、〇七五	六〇	美濃／信濃	金華社／東洋館	□○	九七〇／九〇二半	一般に落付模樣を呈し捗々しからぬ商狀なりし
廿五日	七	三二七	五三五	一三六	—	一五〇半	武藏／信濃	上水社／閑清館	□○	九七〇／九〇二半	前日同樣變りなし
廿六日	一二九	一四九	五〇〇	四六九半	四七〇	三四	三河／甲斐	上細谷製絲／旭館	□○	九七〇／九〇〇	逐電待ちの風情にて沈靜なりし
廿七日	七六	二七四	八七	五	—	二一	美濃／岩代	樋口製絲／共同一馬	+○	九九〇／九〇〇	沈靜にて糸様は保合值は弱含みなりし
廿八日	一〇二	—	—	—	—	—					日曜日
廿九日	一一八	三二九	二二八	二〇	一六六	一一四	信濃／相模	秋津館／漸進社、銀	×□	九五五／九一〇	新規注文纏せざるか如く相場安含なりし
合計	二、八九九	八、九六二半	九、三一九	二、一六二半	四、九一一	七七八半					

尙左に生絲集散前年對照表を掲げて參考となすべし

明治三十七年生絲集散月別表

月次	持越	入荷	賣了	積戻	殘越	輸出 數量	輸出 價格
一月	三三、八〇七半	六、五〇〇半	一七、〇一一半	四九六半	二四、二七二半	九、一二七半	八、八一九、五五六
二月	二四、二七二	二、八九九	九、三一九	七七八半	一七、〇七三	三、五一九	四、八八五、七一六
計	—	九、三九九	二六、三三〇	一、二七四	—	一二、六四六	一三、七〇五、二七二
三十六年同上	—	一一、四一八	一八、六〇三	二、五七九半	—	一一、一五〇	一一、四八四、二一二

紐育市場　（一月三十日報）

紐育絹織物市場は次第に好況となり來れり、季節の始めに於て機業家は一般に織出を手控へたれば昨今に至りて終に在荷の拂底となり、當所必要口の注文は絶へず市場に注入せられつゝあり、特に紋織色物等は機業家の見込織を爲さゝりし結果として全く品切となり、目下多數の機臺は其織出に從事せり、生絲絹織物市場は新く時ならぬ好況に向ひたるより、生絲の需要は著しく増加し近來珍らしき巨額に達したるにも拘はらす、相場は續て弱含みにして過般來割合に手堅く持合居たりし、歐洲細筋も太絲の安直に連れて幾分の下落を告ぐるに至れり、尤も細筋の下落には他に原因の存することにして近年機臺の改造せられて細絲の需要益々減少せるは製絲家の特に注意すべき所なるべし。

尙當國駐在内田帝國總領事より二月二十六日發を以て其筋へ報告したるもの左の如し。

生絲は開戰後横濱市場に伴ひ相場多少下り、取引可なりにあるも實に當座用のみ、機屋の情況惡しからず。

里昂市場　（一月十六日發）

當地市場は取引手控の模樣を示したり、是或は日露事件の切迫せる入電の餘響にや將又機屋の原料に對する需要の減少せしに依れるものなるか、未だ其眞相な知るに由なし、目下の手合は眞の當用口へ補充する爲に取入るゝに過ぎざる有樣なり。

尤絹物商況の先行見込は惡しからずして或は歐洲の流行も絹物に立戻るべき景況見ゆ。

歐洲絲及び東歐の生絲は今週出來直左に

セウエーヌ二等十一―十三　四十八法―四十九法
セヱモン大一等十一―十三　五十三法
同　一等十一―十三　五十一―五十二法
伊太里一等十―十三十一―十三　五十―五十一法
同　二等十一―十三　四十九法

亞細亞生絲の市況は此處爲替高直の爲に相場も從て手堅く持堪へ、就中廣東の器械製絲は目切上直を見せたり、其影響にや上海市場も支那商共直段を引上げたり。

日本生絲の里昂今週の商況は　横濱表高直の餘響にて稍や上進し左の出來直を見たり。

器械一半九―十一　四十七法
同　一半二等九―十一　四十六法―四十六法半
同　一半十―十二　四十五半四十六法
同　一半二等十―十二　四十五半四十五法七十五
同　一半十三―十五　四十三法

同　一年二等十三～十五　　四十二法四十二法半
勝田器　及金叢　　四十四法二十五
倉知國山田總領事より其筋へ報告したる最近電報を揭ぐれば左の如し。（二月二十七日報）

當市場は戰爭の影響を蒙ること甚しからずと雖も、前途の形勢を氣構へ且つ組物（にして當時は需要者は嗜常必要なる生絲を買入れ為めすのみなり、見越の相場は殆ど高氣配の方なり、次に於て器械生絲一番半九乃至十一デニール初四十六法乃至四十六法半の相場なり。

未蘭市場　（一月十六日報）

未蘭市場は取引甚だ平穩にして買人は嗜好直なるのみ買ふ樣なり。

上海市場　（二月十二日報）

上海に於ける生絲商況は其後引續き沈靜の裏に基し、偶々買込まるも直段は安値にして當時は需要者は嗜好直なるのみ買ふ樣なり。

上海に於ける生絲商況は其後引續き沈靜の裏に基し、偶々買込まるも直段は安値にして當時は需要者は嗜好直なるのみ買ふ樣なり。市場は金一夜の間へたるが如き有樣なれ、單賣は買突出に於ける歐米生絲の買控へと、殊に清國の生絲に銀價騰貴の售合益々價格の不揃合ひを來せるものと可し、而して昨今の見當價格は左の如くなりと。

器械絲金巻印十中　一號　八四〇　七星絲金絲綿　五〇〇
同　二號　八二〇　同　絲綿　四八〇
黃絲　上等品　四一〇

會務錄事

役員の出張

本會會頭松平男爵及吉池幹事は滋賀支會及三重支會の請求により出張其發會式並に總集會に臨席せられたり。

蠶絲取引に關する委員會

農商務省產工局より諮問せられたる蠶絲取引の件に關し、本會に於ては別項の諮氏に之が調査を囑托し三月五日本會事務所に其委員會を開けり、委員の來集せる者多からずと雖も出席せられざる人は書面にて意見を送致せられたるを以て、此等を湊合して左の答申案を草せり。

蠶絲の定期取引を公許する以上は標準絲を設けざに對し豫め代用受渡品の格付を定め標準賣買を行はしむるは止むを得ざるものと認む

標準絲は永久に固定すること能はずと雖も現在の市場の狀況に依り器械太一番、細一番半、座繰一番の三種とし代用格付の範圍は上下共に拾錢の開錢に拾貫匁五拾錢止となし其格付は六七月の交に於て取引所役員、生絲貿易商協議の上生絲檢査所の承認を經て決定するを可とす

蠶絲取引の件調査委員

神奈川縣　今西直次郎　　同　橋本重兵衛
京都府　波多野鶴吉　　群馬縣　荻原錄太郎
長野縣　羽田桂之進　　同　尾澤二郎
三重縣　山村作左衛門　　愛知縣　大池鐵次郎
山梨縣　飯島信明　　靜岡縣　依田佐次平
福島縣　青木金次　　山形縣　丸山孝一郎

決算調査委員會

三月六日午前九時より本會事務所に決算調査委員會を開きたりしに、決算調査委員月田藤三郎、林譯作、下田伊左衛門の三氏出席され、詳細に帳簿等を檢閲し決算に關し調査する所あり、吉池幹事逐一説明し、悉く原案に對し承認を與へたり。

評議員會

三月六日午後二時より鮑町區富士見町富士見軒に評議員會を開く、此日の出席者は松平會頭、酒匂副會頭を始めとし左記の十四名なりき。

今西直次郎　　伊藤富次郎　　林譯作
本多岩次郎　　者尾幾造　　吉池慶正
高木三郎　　月田藤三郎　　津田興二
絲木喜三　　中村查　　佐野理八
紫藤章　　下田伊左衛門

議題は第一大集會延期の件、第二評議員選定の件、第三功績調査の件、第四蠶絲取引所に關する件、第五決算調査報告の件にして、第一は福島支會より時局に際し大集會の開設困難なれは延期を請ひたしとの情報に接したるにより其の利害を諮問したるものにして、結局戰時に際しては一層蠶絲業を奬勵するの必要あり、且大集會に於ては評議員選擧なる必要事項もあれば、若し福島支會にて開設するを得ざるとせば東京にて之を開催すべしとの義に決定せり、第二は東京にて大集會を開設するとなりたる結果、例に依り其際選定するに決定せり、第三は福島支會にて大集會を開設するとを延期する結果として之を延期し承認を請はざることとし、功績調査委員は次回まで繼續することに決定せり、第四は今西調査委員より委員會に於ける經過の報告あり、委員會の案を議題とし之を評議せるが、蠶絲の格付賣買の事を農商務省に建議せる横濱蠶絲取引所理事長たる若尾幾造氏は評議員として其席にありしを以て、委しく事情を知了するを得たり、而して評議員中には現今の取引所の組織にては有害無益なれば實際蠶絲貿易の一機關たる樣改善を加へられたしとの希望もあり、又一方に弊害もあれども一方には利益も尠からず此回の改正は必要ありとの義もあり、多數たる代用受渡品の格付を定め標準賣買を行ふも蠶絲業上に格別の影響なしと云ふ説に歸着し、農商務省に對て左の答申をなすことに決定せり。

蠶絲の定期取引に於て標準絲を設け之に對し豫め代用受渡品の格付を定め標準賣買を行はしむるは蠶絲業上に採りて格別の影響なきものと認む。

尚蠶絲取引改善の希望等に就ては幹事より口頭を以て當局者に具申すへしとの附帶決議あり、第五決算に關しては下田

決算調査委員より調査の報告あり、異議なく全部之を是認せり、

右終て鐵路易博覽會賛助委員に對して吉池幹事より日本帝國製絲家名鑑調製の經過を報告し、併て本會より日本出品協會に交渉せる生絲を取扱ふ專門の事務員の件は同會にて之を快諾し、本會の推薦せる大野又次を採用せるに付、本會は同人に對し生絲陳列の順序等を示し、且本會は鐵路易博覽會に關する費用中より若干金を支出し手當となし、日本帝國製絲家名鑑の配付、該博覽會に於ける通信、尚に本會員にして渡航せる者あるときは旅店、博覽會の視察等總て斡旋をなさしむることとし、又紐育方面は佐藤永孝氏に名鑑の配付を依囑せる旨を報告し其承認を得たり。

蠶絲取引に關する答申

別項評議員會にて決定せる蠶絲取引の件に關し、吉池幹事は農商務省商工局加納參事官（取引所主任）に面接して親しく調査委員會、評議員會に於ける希望を話し且其答申書を差出せり。

大集會の位置變更

本會第十三回大集會は福島縣福島町に開設すべく決定せるが、其後福島支會より時局の爲開催困難なるに付延期し度旨申請ありしを以て、事情止むを得ざるものと認め之を許容し更に四月二日を期し、東京府北豐島郡西ヶ原東京蠶業講習所内に開設することに變更せり、叙て諸君の來會あらんことを望む。

富山支會總會の光景

東雲の天地は妖雲慘憺何時雷煙彈雨の活劇を現出するやも識るべからず、此時に當り富國の經營を以て己れの天職となす大日本蠶絲會富山支會は議報の知くに二月七日午後一時富山市總會通用機に於て第三回定期總會を開會したり、席定るや本橋幹事は昨二十六年度に於ける左の事業報告を爲せり。

第一　蠶絲業組合設立勸誘の件

昔く當業者を勸誘し協議會を開催したりしも不幸成立を見るを得ざりし。

第二　風穴調査の件

縣下新紙に其所在地を懸賞募集の結果二十二ヶ所を得調査を爲したりしか未た好適の場所を發見すると能はす。

第三　支會備品たる消毒器及蠶種貯藏器貸付の件

第四　石川縣に開會したる同國蠶絲大會に出席したる顚末報告の件

第五　役員異動の件

前項報告を終り滿場一致の承認を經たり、尚從來役員の任期は悉皆滿了したるを以て役員總選擧の件を議場へ請求し改選せる結果左の諸氏當選せり。

幹事長　田村　惟昌

幹　事　藤澤助太郎　本橋保次郎　清水安五郎

評議員　林　昌作　橋爪秀太郎　坂東　義一

清水　恵治　小菅　次男

地方委員は其必要なきを認め全部廢止することゝなせり、

右選擧を終り協議會を開き三十七年度に於ける當支會の行動に付左の如く蠶絲業上に對する奬勵方針を確定したり。

第一　縣下各郡に於て蠶業講話會を開設すること

第二　縣下蠶絲業功勞者を調査すること

第三　當縣に於ける蠶業改良策を新紙に廣告して懸賞募集すること

右滿場一致を以て決定し終て懇親會を開き午後七時散會したり尚當日の總會は頗る盛會にして同支會開設以來空前の光景なりし。

滋賀支會發會式景況

蠶業奮勵諭令渙綸綸由て古來知られたる滋賀縣の蠶絲業も爾後、後進府縣の著しき進歩に似ず大振はざるの觀ありしか、有志梅本周吉氏等之を憤し振興の機關として大日本蠶絲會滋賀支會設立の議を出し、當時極く六十餘名の會員なりしを東奔西走之が蒐集に力め二百名に近き會員を得て、茲に支會設立の認可を本會に稟請し速に其裁可を仰近く之か發會式を擧げんとせしが、恰も善し松平會頭が鐵路易博覽會の要務を帶びて關西地方に出張せらるゝを聞き、急に發起人會を開きて之が臨式を本會に申請し、茲に去二月二十六日同縣長濱町議事堂に於て盛大なる發會式を擧行するに至れり、今其順序を記さんに於て午前十時と云ふに會員百三十餘名着席仰立總會を開き布施孫一郎氏の勸議により友田勉三氏を假會長に推薦し、先づ發起人總代梅本周吉氏支會設立の趣旨及經過を報告し、次で會則を議定し評議員選擧に移り、假會長より布施孫一郎、村田甚太郎、肥田嘉藤太の諸氏を詮考委員に選定し直又次郎、藤本角次、肥田嘉藤太の諸氏を詮考委員に選定し直に評議員會を開き役員選擧を行なせり、右に總會を了し來會者には午餐の饗應あり、午後一時に至り會頭臨式時間の都合より先づ講話會を開き本會技藝委員京都蠶業講習所技手山本竹識氏の講話あり、來會者五百有餘名、氏は蠶種の選擇と飼形との關係に就て之を題し總衆に大なる感動を與へて布施孫一郎氏又一場の蠶業談をなせり、同二時半に至り松平會頭隨員二名、吉池本會幹事、員谷本縣書記官藤田縣屬同事にて來着せられたるを以て直に發會式を擧げ、員谷支會長は式辭として一思の演說をなし、次て松平會頭は徐ろに壇に進みて戰時に於ける後援的團體の成立を祝し將來の奮興を望むとの莊重熱誠なる辭あり、會者に非常に刺戟感動を與へ、次で吉池幹事池田縣立農學校長、友田坂田郡長等の祝辭演說及横山縣會議長小川東浸井、林田伊香郡長等外十數通の祝電祝詞あり、次で會員總代西島仙太郎氏の答辭あり、茲に無事盛大なる會合を結了し、會員一同の滿足四上に逸し、會頭一行は直に三重支會總集會に臨式すべく出發されしを以て一同見送り、大日本蠶絲會萬歲を唱へて散會せり、左に當日の式辭告辭等を掲くべし。

梅本發起人總代本會設立趣旨

懸賞經が本邦産數の蠶絲業地と上稱西に創立揚げし時代は物さは經過ぜんとし

つゝあり、本縣蚕業の前途を憂ふるもの誠に切なるものあり。然るに之れが振興發展の道を講ずべき事たるや、固より之れに直接として官民共に各自の必要に於て其政策の冷熱なきを如何ともせず、況んや之れに対する本縣の蚕業者の態度は如何なるや、之れ本縣の蚕業者の自覚の足らざるに因るものにして、之れ本縣の蚕業者の自覚の足らざるに因るものにして、之れ本縣の蚕業者の自覚の足らざるに因るものにして

通常會員　鈴木秀壽
靜岡
本會今員現在數（三十七年二月末日調）
會員數　七千二百四十八名
内　譯
名譽會員　二十七名
特別會員　二百五十八名
通常會員　六千九百六十三名

蠶桑雜觀

内地機業と地遣絲

内地に於ける機業は年の盛否により、原料需要の趨を異にすれども、大抵横濱より幾分の補充買入を爲し、羽二重其他の原料に供するを常とす。從來は輸出に適不適を論ぜず、横濱に一旦輸送し來り、然る後内地の注文により再び積戻すの習慣となりたるを以て横濱より各地への輸送高も多かりしと雖も其後地方に於ける製絲家も内地需要の大勢を察し、輸出に適するものは之を横濱に輸送するも、不適の品は直ちに地元にて買却するを常とするに至れり。故に地遣取引市場に多少の變替を來したるが、從來とても輸出に適せざるものゝみの取引に過ぎざりしを以て敢て輸出向きには影響を與へざるのみならず、却て是が爲め地方製絲家の如きも品質を撰別して出荷するに至りしを以て市中に於ける在荷も既往の如く輸出不適當品を見出さるに至れり、是が爲め横濱より各地への積戻高も年々減少の傾向を呈し、去る三十一年以降昨年三十六年迄の内地輸送高比較は左の如くなりと云ふ。

明治三十一年　一萬五千六百三個
明治三十二年　一萬六千四百九十二個
明治三十三年　一萬五百四十五個
明治三十四年　一萬四百七十三個
明治三十五年　一萬千三百三個
明治三十六年　一萬二千五百九十七個

松平男爵送別會

大日本蠶絲會會頭松平男爵は米國聖路易に開設せる萬國博覽會の副總裁として渡航せらるゝに付、祖道の宴を設け、聊か送別の意を表する爲、豫定の如く三月六日午後四時より麹町區富士見町富士見軒に開く、關西地方々來會の人は時節柄汽車の遲着の爲間に合はざる者ありしに拘らず頗る盛會なりし、而して宴席半にして酒勾副會頭は發起人を代表し日本は現今非常の場合に遭遇し、一方滿韓地方に於て露國と戰爭をなし、一方米國博覽會に於て世界と商工業の戰爭をなしつゝあるに當り、本會會頭なる松平男爵は商工業に於ける戰爭の總指揮官として、出張あるは國家の爲又本會の爲洵に喜ふへき事にして、其成功や期して待つべきものあれば、長途千金の身を自愛せられたしとの辭を述べ、松平男爵は現今國家は非常の時に際せるを以て武力の伸暢と共に財力の發展は甚だ急務にして、財力の發展は輸出を盛にするにあり、此目的に對て此回の博覽會は極めて好機會なり、余は素より其器にあらざるども、既に命を承け、又聊か期する所あれば、國家に貢

献する考なりとて厚意を謝され、主客共に陶然として醉を揉りし頃、薩摩琵琶の名手は席の一隅より送別の辭、次て新作旅順進行の曲を演奏せるが、勇壯凛烈聽者をして渤海波濤の邊我海軍の猛將露艦を擊破するの狀實に此の如くなるべしと感歎せしめたり、次に白虎隊の曲に移れるか、義に厚き青年が奮闘し刀折れ矢盡き自殉するの狀人を悲絲たらしめしものあり、此會に出席せられし人名は左記の如し

（いろは順）

今西直次郎　伊藤富次郎　今井元介
伊藤鉛太郎　林　鶴作
林　經次郎　八田徒也　林　鶴作
木多岩次郎　森木長
尾澤福太郎　吉田長正
橋田長太郎　高崎治平
津田興二　高木三郎　吉田長正
中村彦　中村雅次郎　有働直矢
生方五郎　岡中文治　町田穣
小池市松　佐々木忠郎　佐野禮八
酒勾常明　紫藤亨　下田伊在衛門
諏谷典二

臺灣に於ける養蠶業

古來臺俗奢侈を向ひ、日常の衣服に、紬緞絣羽を用ゆるものあり、而して皆之を支那本土に仰げり、臺灣の地、桑を產せざるにあらず、又蠶を生ぜざるにあらず、既に古き諸府廳縣志の中には、其の物產志に「蠶」の名目を記しつゝあり、然れども皆で之を利用するを知らざりしものゝ如く、該怪下に皆記して「絲を吐き帛を爲くるべし、但だ未だ能く之を纏者有らず」と曰へり、稀には之を飼育するの家ありと雖も、僅に燈臺に放ち、眉面に載せ、之に絲を吐かしめて、自ら機るに任せ、取りて以て一種の御玩となすのみ、是より先き、閩浙總督范是承請保、嘗て「蠶桑要法」一書を著し、以て閩人に教へたり、蓋し經傳に載する所の「天下の土蠶桑に宜しからざる者無し」と云ふに據れり、而して特に育蠶桑の法或は未だ講習せざらんことを慮り、乃ち檢十二圖を爲くり、之を各縣に頒ちて勸奬の資となせり、然れども終に行はれざりき、康熙五十四年、諸羅の諸生陳夢林の諸羅縣志を修するや、志中に論じて曰く、

諸羅の下土墳遍は、小雅の詩に「陽桑有阿」其葉有「饑」と曰へるが如く、畝を開き、桑を樹ゑ、蓄衍沃若たらしめんこと疑なきなり、因りて以て種を購ひ、蠶を育はゞ、即ち蠶事興らん云々、

次て康熙の末年に於ける朱亂善後の經營に盡瘁せし、藍鼎元も、亦其の治臺、方策の中に論述ふらく、臺地、蠶桑せず鷄苧を種へず、故に其の民游惰多し、婦女は綺縠を衣とし、珠翠を粧ひ、遊を好み、俗を成す、則ち桑麻の政や、緩ふすべからざるなり、臺土寬曠、最も桑を樹するに宜し、探泉に木綿多し、民をして內地に於て其の核を收め、蔡に趣き之を種ゑしめ、竝に廣く麻苧を種えしめ、練紝して冬夏の布を爲らしむべし、婦女に蠶桑あり、紡績之れ務むれば勤儉風を成し、民富ますべくして、俗美にすべきなり、

此等の意見繼紹し、其の頒要を唱道せしは、道光中に成れる彰化縣志にして、其風俗志の中に曰く

彰化は、其の土蠶に宜し、木綿に至りては更に平原沙磧多く、吉貝(ぬの)は即ち班芝(ぬの)相望めり、果して其の法を善くし、而して之を蒔かば、地豈寶を惜まんや、誠に蠶績をして與び興らしめば、布帛充牣、同器相從ひ、籌邊日を賜き、之を成す易からず、之に服する數ふ無く、勤儉の風、隆を國雅に比せん。

然れども單に利用の文辭を志籍の中に飾れる外には一も實行せられずして、依然紬緞の供給を對岸に仰ぐるのみ、近代に及び、臺政刷新の一偉人遇撰劉銘傳は、夙に實業の振作に心を用いし結果、光緒十五年十月、雲林知縣李驂奎外一人を支那本土に派遣、安徽、江蘇、浙江の各省より桑苗、蠶種を島内の有志に頒遣、又奬勵を示し、又臺北の富豪林維源をして、桑樹を大稻埕に栽殖せしめ、成に養蠶業を興すの計畫を立てしも、惜ひ哉其辭任と共に中止せりといふ(本會特別會員平野師應氏通信)

屑絲業者の失敗

横濱に於ける屑物は南三年來頗る活潑の貴行きありて、相場も開港以來未曾有の高價を示したり、然るに昨年十二月以降は海外の情勢面白からざるに、之に加て内商が種々なる粗惡品を賣込みたるより、本邦屑物は歐洲に於ける各紡績業者の信用を失し、海外よりの注文寡く、其結果安直に賣出さゝる可らざる後過に陥り、手合角に安直を示して今や高直よりは四五十間乃至五六十間の低落となりたり、然るに横濱問屋も地方の荷主も一時の好調子に甘酔して無暗に高直に買進みたるより、今は何れも莫大の損失を蒙る事となり昨年新物當初に多少の利潤を見たる者も差引の上に於ては甚だしき失敗なりと云ふ者あり。

組合警見

組合名稱	組合事務所位置	組合地區	營業の種類	設立年月日	組織	長
島根縣色紙製造組合	邑智郡川本村	邑智郡	養蠶、蠶種製造、蠶繭の販賣	三十七年十一月	民之助	安田
熊本縣蠶種製造組合	大字川本	一圓	蠶種の製造及小作人に貸與	三十五年十月	安田	赫吉
蠶絲同業組合	國分町百八十一	國分町及小作人の居住する一圓	蠶繭、蠶種、桑苗、桑葉、桑樹、蠶具、蠶具類、蠶具類製造、蠶具類販賣、蠶具類修繕、蠶具類販賣	三十七年十一月八日	熊部	素平

組合の解散

組合名稱	解散年月日	理由
山形縣山形市蠶絲同業組合	三十七年二月十九日	農商務大臣ノ解散命令
岐阜縣不破郡蠶絲同業組合	三十七年三月二日	任意解散

蠶海涓滴

▲戰勝の好友　譬に直に各外國に現はれ、日本品の實行如何で佳良なりと、此際農業者是程一番海外未聞の地に對て奴時の間拓か勢むれば成功疑なしも、器械の便否、藥品の良否、施行の方法などは、當業者詳しく知らないから、勞して效なきに終る者も寡くない、それから近頃は蠶病消毒の聲が高まると同時に、地方の淳朴なるも尚餘あるの所業である、土屋岩淵兩氏は其道の通者で、今度實驗蠶病消毒法を識されたのは之を救援する目的に適ふと思ふ、斯業の爲に喜ふべき次第で、又文章は言文一致で讀み易い、强て穴探しをしたならば文字は少しく堅いのが交てるとも、誤字のないのは玉に瑕だ、けれども其内容は蠶體の病理より消毒器具の比較、藥品の鑑別、消毒の方法等詳細に渡りて、之を讀めば右より左消毒を完全に行ふことが出來ると云ふ工合で、養蠶家に採りて好個の讀物だ、又短期講習會用としても面白い、それで此業の爲此書の世に現はれたるを喜び、併て兩氏の勞を多しとする(菊版一五二頁〈代價は不明〉

▲殊に聊路易の蠶國聯盟會に平和前戰爭の手腕を揮ふべき黄海にあらずや、敵を相摩するの勢ひ及て之に當らば豈海軍のみ功名を擅にせしめんや、

▲構濱市場の　悲際として巷も活氣なきは、海外の組織物不振の影響にあらずして、外商等が日露戰爭の結果、本邦の製絲業が投資する者あるべきを期するに出、つゝ實に水鉢千萬と謂ふべし、然れども是又從來の商業と、製絲業たる者自愛自覺に進ずるの秋に當せよ、

▲時局に對し　最も打擊を被むるものは內商無用の機業者なり、從來不敬紙の爲に罹られ、其の位置の如きは、自ら一高價を獲なりて、各氣の毒なる義、

▲徴收時稅として　組織改良を徴收すと雖た日に、機械產を致すべきや、價値高騰し、足元の用い內に製品を輸出用に換るを信賴とせん、是は一の疑心、

▲製絲家も亦　然り、地道時を製造せし者は輸出用に改むべし、斯く問はゞ當稅の効を減ずる如し、却て海外より巨多の需要を吸收するを得ん、

▲蠶絲業界に　其人ありと知られた長野縣の片倉兼太郎氏は組員市役所の識一萬數千の職工を戒飾し勉勵怠なさしめ、自ら一高價を獲納せりと、

▲美聲ふる散　産に數無に殘へるべければ初は比較的心慰とし所次增加の決心なりと、

▲米國市場よ　り伊佛を飯の一支那を騙り日本絲の開樓とするは故て壯言大西にあらず、蠶絲業者の決心次第で成功するは常々信じて疑ひざる所なり、

新刊批評

實驗蠶病消毒法　土屋泰岩淵平介共著　東京丸山舍發行

蠶病消毒の急務なるは既に世の認識する所もあるけれど

日本野蠶論　東京村井兼藏著　東京興文社發行

近來作蠶絲の輸入增加と共に作蠶の飼養も注意を喚起せられ、新聞に雜誌に著述に作蠶に關するものを散見せり、此著述も此時勢に迫られて出現したる所謂際物なり、而して天蠶、作蠶、樗蠶、樟蠶の四種に就き歷史、形態及其食物、飼育法、繰絲法其他を簡單に記載せり、野蠶に關する概念を知らんと欲する者は一讀するを要す、絲質善良、印刷鮮明六六頁の小冊子なり(定價五十錢)

栽桑教科書　農學士石渡繁胤岡田穎次郎著　東京興文社發行

桑園
同
同
同

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES REPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Fevrier 1904.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(February 1904.)

		Report.	Brought over.	Arrivé.	Arrived.	Vendu.	Sold.	Exporté.	Exord.	Renvoyé.	Sant back	Areporter.	Broushi forward.
Filature.	Filature.	10.710	*Picul.*	1.396	*Picul.*	4.273	*Picul.*		*Picul.*	217	*Picul.*	7.617	*Picul.*
Zoguri.	Reeel.	2.334		56		739				97		1.554	
Kakoda.	Orikayeshi.	569		168		230				91		416	
Autres.	Other.	40		11						33		18	
Total.		13.652		1.631		5.242		2.763		438		9.604	
1903.		9.796		1.541		2.880		4.111		606		7.792	

一金參圓　一金五圓　一金五圓　一金五圓　一金五圓　一金七圓　一金七圓　一金拾五圓　一金拾五圓

○滋賀支會役員氏名附金

滋賀支會役員氏名附金

京都

一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓　一金壹圓

近江絹糸株式會社

一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓　一金參圓

同縣　清山勇　笹大　上武　羅村　中西　中
水岡　川林　田鹿　倉左　川三　庄次　盛吉
本原　傳藤　治治　藤之　彦太　藤入　右衛　郎助
兵　緒　郎　郎　助　郎　郎　郎　郎　郎　郎
藤三　郎　郎　吉　助　郎　郎　郎　郎　郎　郎

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Soie. Silk. — Prix moyen. Standard Price. — Maximum du prix. Highest prices.

cours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Filature. Hosoito. Extra. No. 1		Filature. Futoito Extra. No. 1		Zaguri. Rereels. Extra. No. 1		Kakeda. Orikayeshi. Extra. No. 1		Noms des filateurs Names of filaturs.	Prix. Prices.
1	Piculs. 50	Piculs. 159	Piculs. 30	Piculs.	yen 1020	yen 1000	yen 1035	yen 960	yen 965	yen 955	yen 925	yen 905	Koseikwan.	1000
2	155	142	4		"	"	"	"	"	"	"	"	Yawatasseishijô.	970
3	80	169	6		"	"	"	"	"	"	"	"	Sangiosseishijô.	1040
4	100	296	11		"	"	1030	945	"	No stock	"	"	Rokumonsenseishikwaisha.	1040
5	99	109	23		"	"	"	"	"	"	"	"	Kamihosoyashijô.	985
6	44	300		728	"	"	"	"	"	"	"	"	Shunmeisha.	975
7	33													
8	39	97	25		1030	1000	1030	945	950	No stock	910	885	Sanseisha.	930
9	121	56		244	"	"	"	"	"	"	"	"	Ishikokaseishijô.	950
10	85	80	4		"	"	"	"	"	"	"	"	Mitsukawasseishijô.	980
11	77		10		"	"	"	"	"	"	"	"		
12	42	172	26	48	"	"	"	"	"	"	"	"	Shunmeisha.	960
13	137	78		47	"	"	"	"	"	"	"	"	Sugihanseishijô.	950
14	60		36											
15	14	57	4		1010	980	1010	925	940	No stock	910	885	Watanaseishijô.	1055
16	95	96		96	"	"	"	"	"	"	"	"	Shôjôkwan.	1020
17	16	234			"	"	"	"	"	"	"	"	Ashidaseishijô.	980
18	10	286	4		"	"	1015	935	945	"	915	895	Marushfroseishijô.	930
19	17	214	2	424	"	"	"	"	"	"	920	900	Hachimanseishikwaisha.	980
20	1	428	5	213	"	"	"	"	"	"	"	905	Tôgunsha.	1020
21	15													
22	1	720	34		1010	980	1015	945	960	No stock	920	905	Kijokwan.	1020
23	46	528			"	"	"	"	"	"	"	"	Iyoseishikwaisha.	1040
24	52	251	34	605	"	"	"	"	"	"	"	"	Kinkwasha	970
25	4	301	85		1000	970	"	"	"	"	"	900	Jôsnisha.	970
26	72	281	19	264	"	"	"	"	"	"	"	"	Kamihosoyaseishijô.	970
27	43	50	12		"	"	"	"	"	"	"	"	Higuchiseishijô.	990
28	57													
29	66	159	64	94	1000	970	1015	945	960	No stock	920	900	Akitsukwan.	955
	1.631	5.273	438	2.763										

1 yen vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

avec ce pays, mais encore parce que l'existence séparée de la Corée est essentielle pour la sécurité de notre Empire. La Russie, néanmoins, contrairement aux engagements faits à la Chine par un traité solennel, et contrairement à ses assurances répétées, données aux autres puissances, occupe encore la Mandchourie, a consolidé et fortifié sa domination sur ces provinces, et a décidé leur annexion finale. Et de plus, l'absorption de la Mandchourie par la Russie rendrait impossible le maintien de l'intégrité de la Chine et entraînerait l'abandon de toute paix en extrême-orient, nous avons décidé en ces circonstances, d'arranger ces questions par des négociations et d'assurer ainsi une paix permanente. Dans ce but, nos autorités compétentes firent, par notre ordre, des propositions à la Russie et de fréquentes conférences ont eu lieu pendant l'espace de six mois. La Russie, cependant, n'accepta jamais ces propositions dans un esprit de conciliation, mais par ses retards voulus a empêché le règlement de la question et en prêchant ostensiblement la paix d'un côté, tandis que, d'un autre, elle complétait ses préparatifs navals et militaires, cherchait à accomplir ses desseins égoïstes. Nous ne pouvons absolument pas admettre que la Russie ait eu dés le début quelque sérieux ou véritable désir de paix. Elle a rejeté les propositions de notre governement ; la sûreté de la Corée est en danger ; les interêts de notre Empire sont menacés. Les garanties pour l'avenir que nous avons echoué à obtenir par des négociations pacifiques, nous ne les pouvons maintenant rechercher qu'en en appelant bravement aux armes. C'est notre désir le plus ardent que par la loyauté et la Valeur de nos fidèles sujets, la paix puisse être bientôt rétablie d'une façon permanente, et que la gloire de notre empire soit préservée.

MARCHÉ DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre Marché au mois de Février 1904.

La première dizaine a été caractérisée par une assez grande acalmie. La situation politique devenant de plus en plus grave, les demandes nouvelles ne sont point arrivées ; quelques ventes de petits lots sans importance n'ont été que le résultat des besoins immédiats. Dans la dizaine suivante, les *orikopski* ont bénéficié d'une plusvalue de yen 5 et les demandes nouvelles ayant été télégraphiées, le marché a montré une grande activité. Il s'est vendu journellement, pendant trois ou quatre jours, plus de 1000 balles et les prix, favorisés de cette activité, ont marqué une nouvelle hausse de 5 à 7 yen. Mais entrant dans la dernière dizaine, le ton du marché est devenu de nouveau très faible, on n'a enregistré qu'un très petit courant d'affaires et les prix ont montré une tendance à la baisse.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement des soies durant la période du 1er au 29 Février 1904.

RAW SILK MARKET.

THE YOKOHAMA SILK MARKET.

The condition of the silk market at Yokohama during February last :—

During the first 10 days, the market was calm. Only these goods for immediate purposes were transacted in consequence of the situation having become very much strained.

In the beginning of the middle ten days, the quotations rose by 5 yen. Fresh orders having been received from abroad, the market became active, that over 1000 bales were transacted in 3 or 4 days ; and in consequence of which further rise in the quotations were made from 5 to 7 yen.

In the last ten days, the market became quiet and the quotations showed downward tendency.

The following diagram shows the movement of raw silk during February last.

NOUVELLES DIVERSES:

La déclaration de Guerre.

Voici le texte de la déclaration de guerre publiée dans la nuit du 10 Fevrier :

Nous, par la grâce du ciel, Empereur du Japon, assis sur le trône occupé par la même dynastie de temps immémorial, lancons ici proclamation à tous nos loyaux et braves sujets, comme suit :

Nous déclarons ici la guerre contre la Russie et commandons à notre armée et à notre marine de porter les hostilités contre cet empire avec toutes leurs forces et nous commandons aussi à toutes nos autorités compétentes de mettre tous leurs efforts dans l'accomplissement de leur tâche et dans la mesure de leurs moyens pour contribuer aux fins de la nation de toutes les manières dans les limites du droit des nations. Nous l'avons toujours jugé essentiel dans les relations internationales et nous en avons rendu notre but constant pour augmenter le progrés pacifique de notre empire dans la civilisation, pour fortifier nos liens amicaux avec les autres états et pour établir un état de choses destiné à maintenir une paix durable en extrême-orient à assurer la sécurité future de notre empire sans léser les droits et les intérêts des autres puissances. Nos autorités compétentes se sont également acquitté de leurs devoirs en obéissant à notre volonté, si bien que nos relations avec touts les puissances ont largement crû en cordialité. Ce fut entièrement contre notre attente que nous en sommes malheureusement arrivés en hostilités ouvertes contre la Russie, L'intégrité de la Corée est une question d'attention constante pour cet empire, non seulement par suite de nos relation traditionnelles